俳諧故人續五百題

下

古人續五百題　秋之部目録

附候の部

名月　初丁
名月西　一
月見　二
月　三
三日月　三
待宵　三
十六夜　四
后待月　四
龍田姫　五
文月　五
葉月　五
菜月　五
そら秋　五
七夕　六
立琴　六
銀河　六
かさゝぎの橋　六
頼ひの糸　六
干素麺　七
せゝらぎ　七
高灯籠　七
そゝり火　七
おそり火　七
蟲ぶすり　八
初秋　八
蓮飯　八
墓詣　九
生身魂　九
盆の月　九
おしぐさ　九
西瓜　九
花火　十
残暑　十
そゝまつり　十
籠風　十
月入　十二
ものさ置　十二
捨ちゝ　十二
初あらし　十二

露 十二
稲妻 十三
木綿 十九
遅峯入 二十五
鈴虫 十六
鳴子 十七
蓑虫 十七
河鹿 十八
搗衣 十九
ちん酒 二十
秋の霜 廿一

霧 十三
野分 十四
田刈 十五
後徒家 十五
ちま牽 十六
引板 十七
ちん魚 十七
沙魚 十八
漸寒 十九
雪吹 二十
長き秋 廿一

後の穀入 十三
早稲 十四
晩稲 十五
ちん潮 十五
放生会 十六
落し水 十七
肴簗 十八
升市 十八
朝寒 十九
秋の西 二十
移り暮 廿二

二百十日 十三
落穂 十四
司召 十五
八朝 十六
かゝし 十六
渋鮎 十七
鯨 十八
新そば 十八
夜寒 十九
穐空 廿一

植物の部

林 廿二
一葉 廿三
木槿 廿四
蔓珠沙華 廿五
海棠葉 廿六
ふゝ草 廿七
花野 廿八
野きく 廿九
稲 三十
赤桔 三十一
ねぎ 三十二

葡萄 廿二
柿 廿三
葛の葉 廿四
男郎花 廿五
我木瓜 廿六
稲のそよ 廿七
蓮の実 廿八
桔梗 廿九
ゆうぎき 三十
蘆穂 三十一
かるかや 三十二
尾花 三十三

梨 廿三
草の花 廿四
鼠尾草 廿五
あさゞほ 廿五
萩 廿六
番椒 廿七
蘭 廿八
落 廿九
雞頭 三十
尾花 三十一
鳥 三十二
刈萱 三十三

若たかこと 廿二
女郎花 廿四
蔦もみぢ 廿五
芙蓉 廿六
萩 廿七
糸瓜 廿八
もゝ花 廿八
紫苑 廿九
蓼の花 三十
菜 三十一
梅もどき 三十二
刈萱 三十三

木犀 三十三
栗 三十四
虫 三十五
秋の塊 三十六
蟀 三十八
しとゞ 三十八
蜀の音 三十九
蓑虫 四十
帰燕 四十
鳩吹 四十一
冬近 四十二
木の實 三十三
熟柿 三十四
蟋の部
秋蝉 三十五
亀蛩 三十六
義山― 三十七
蟷螂 三十八
小鳥 三十九
蜻 四十
鴫 四十一
鹿笛 四十一
部分 百七十三題
椎の実 三十四
紅葉 三十四
茸 三十五
秋蚊 三十六
鈴虫 三十六
きりぐす 三十七
蜩 三十八
雁 三十九
鶉 四十
鶺 四十一
康 四十二
行秋 四十二

古人續五百題 冬之部目録

降物之部
初雪 初丁
霜 四
氷室 六
時候の部
神無月 八
冬至 九
建子忌 十
雪 二
霜枯れ 四
氷 七
雪車 七
小春 八
神おくり 九
伊勢講 十
雪 三
あられ 五
凍 七
師走 九
十夜 十
ひびき 十
みぞれ 一
氷柱 八
冬の雨 七
暮月 八
神の留る 九
ひびき漬 十

暦うり 十一
里神樂 十一
大師講 十二
木の葉 十三
枯柳 十五
山茶花 十六
冬の梅 十六
茶花 十七
枯芦 十八
大根曳 十九
生類之部
鯨 二十
千鳥 二十
鴨 二十一
鷹 二十一
夜鷹曳 廿三
鶏突 廿三
鰯代守 廿四
鰤 廿五
河豚 廿五
鮟鱇 廿五
時節の部
乾鮭 廿五
ぐるめる 廿二
木兎 廿三
粟 廿三
魚袋 廿七
紙子 廿八
火燵 廿九
湯婆 三十
口切 三十一
褌着 三十一
火鉢 三十
火桶 三十
炭の子 三十
髪置 三十一
火焼 十一
芭蕉忌 十二
佛名 十二
こがらし 十四
冬木立 十四
枇杷の花 十五
冬椿 十六
枯尾花 十七
冬かれ 十八
枯野 十八
麦まき 十九
冬目一
冬目二
冬至梅 十六
冬の牡丹 十七
寒菜 十七
草うれ 十八
ねぎ菜 十九
冬の蝿 廿三
網代守 廿四
鮟鱇 廿五
冬ごもり 廿七
火燵 廿九
婆 三十
口切 三十一
褌着 三十一

燒 三十一
炭賣 三十二
雪の人 三十四
霜やけ 三十四
節季ゐ 三十九
年の市 三十六
生〜志 三十七
春待 三十七
家の暮 三十八
櫂 三十二
冬の月 三十三
寒垢離 三十四
冬日 三十四
燈挑 三十五
節分 三十六
行年 三十七
岡見 三十七
年内立春 三十九
炭竈 三十二
寒月 三十三
臘八 三十四
冬夜 三十四
餅搗 三十六
厄ちらし 三十六
年の歯 三十七
とし〜龍 三十八
炭 三十二
寒聲 三十三
眠 三十四
風呂吹 三十四
衣配 三十六
格さと 三十七
流々年 三十七
大晦日 三十八

都而 百四十一題

四季合 六百拾七題

古人續五百題發句集

月名

穐之部

月ゑ金今宵一瀉かけ流なし　宗因
名ゑ名りそもく〜是ハ秋の月　守武
名月ゑ禁のきりゝ田のくりゝ　芭蕉
今宵は月小盃へなけとくん　素山
めいろ〜や居酒のまんと頬かふり　其角
月をたゝの今宵ゑ明て仏ゑ　鬼貫
名月ゑいろ〜ものひの月や三五良　立圃

名月や折の枝とそらく嵐雪
めいろうや海もおぼろに山もこんと　去来
ちとせ森よろふの月まさ望の月　尼尺
名月や車きしらとは番家　太草
めんろうや土手のそろれのあひれ藪　浪化
隨分とはしもも生りろふ村月　路通
名月やそろそろく歩行草の中　傘下
名ろろや穀の声と犬のちろ　二水
めいろうやちふねとろの朝わふけ　野坡
更くくて鞠頃ととしけふの月　言水
名月や今日とあそろ秋の昏　支考
めん月やきのふの雨は葉大根　夕日

名月や虫ゑとろよもとぐら　村若
めの月や碇うち込む波のろま　買山
名月や陸のそるあろる日代ろあん　知足
焚ろてしく竈も雨けしろふの月　友幽
名月や里の白ふの青き柴　木枝
名月ゑろくろとて虫ゑとろ我　野童
めいろうやそろろく鶏は俄き寒　浪化
名月のとれもめくみや菜大根　許六
名月や寒中よ稜を出と半ろれ　千那

月見

月見とて所々うかれあるき歌もよむ
月見せん伏見れば城のとなり廓　芭蕉
ようやくと坊へあしは辺む月見うれ　去来
隈もなく名もなき死の月見哉　唐介
さしきよりて我舟さして月見う角　意情
鑰もなき庵あのうら陰月見うる　浮葉
あきやうな内氏出くまる月見氏　紅梨
待も雲ふなりうら陰月見この那　利牛
　　史邦

名月　両

とのゝ火やおのれうほなる両の月　鬼貫
ふれくとて雲うらふ蔭しうふ社月　両桐
名月や両よりとてあふ風光て　丈草

月

我条ふ我ふうせうり月我新　素堂
中とうとて東氏ようやく宜一の月　其角
隣ようり破風のかけうる月我我　仙杖
江の月や深み浅この蝋ふら　鍬立
けうときふふ小ーうて氏むく月よ氏　昌碧
かるくと笠のうえ月月夜ふ　梅舌
子氏抱く湯は月のそくまうら我　北枝
おかーけふ誉てなうあれ月我れ　一髪
ととまてもえ通を月は野中うる　長虹
月のなれ中うふさーきも焼暑り　万乎
京条紫去年は月ふ俗中間　丈草
穂をりの月よ鳥いらうもいく　鬼貫

初月

初月の弓ふ強なり　雁のこゑ　言水

そんの月や物は香さある霄の宿　移竹

三日月

蜻蛉は羽ひ志ぬまる三日の月　其角

電のきえてのこほろ三日は清き　文鳥

三日月や柱ふきわれ高燈籠　錢芦

はつ〳〵穂をまけて出る三日のろ　李由

三日月の数ふ道のはきあとる　万声

待宵

待宵や翌を二見へ道者と連　支考

まつよひや流浪のうへは秋のそら　雅然

待宵弧まん賞せそ年のわと　牧童

まつよひや翌の連哥の表せん　素堂

十六夜

うるはなよ師匠用待宵の興　梅通

待宵や立ぢくしゝるる糸の表　乙由

十六夜もまつと更科の郡この条　芭蕉

そんつゝや十六夜まてれ二タとる嶽　耒山

いさよひや終眼閑はうふ志ろも　甚角

十六夜や首馬弧出くかゝほ人　許六

いさよひや聖田ろのとる神明謙一　毛紈

十六秋はけ〳〵き分ろり北良伊吹　汝村

いさよひや眠れまも分れ海り五位　野坡

ひきよひそさ〳〵ゆく宵の秋　洒堂

いさ宵や家出の逢ひ人ふ熙　乙由

後の月

うまとさきねとて後やの月の十三夜　素堂
海山ぶ月をて後の月を一部　去来
百菓は香ぶあらあてや後の月　洒堂
影ふさよたらふね月とて月数ぶ　杉風
後の月きこめ待てしや秋茄子　杏雨
三天の松風さふし後の清さ　野坡
後は月入てかけし星は空　鬼貫
穂のうえふ高低もありのちの月　游方
寒ふけの巨燒もあり後の月　斜嶺
月とちは袖を木の葉の十三夜　亀春
草も木も此国ふりや又の月　全暇
酒はきて晴のさふあや後の月　長父

龍田姫

うまとなるねのふうきふとられ龍田姫　和及
うかるふとはりの顔ひやふと姫　昨非

文月

文月や法ぶ感とる蚊やのうち　其角
かるきくるる為月の初うれ　良徳

葉月

八月も一下ふてあつし赤ふん日　指巾
野も山も露ふ赤ふるる月うれ　李雲

菊月

あふふ九月日和や薮の照り　水美
長月やふふ留ふれ水ふる　尺艸
菊月の清ふみうあやし空の星　良徳

初鶉

芭蕉

たゝの秋や海も青田の一ト みどり

鬼貫

初秋はとれゝ露さらめのはぎ白

卯七

鶉なくや朝日汐はけしちらみ

去来

鶉なくふるさやはらの秋の日数哉

荊口

そゝの秋かうとゝえんとゝあんもれ

風國

海山のとゝ鳴くやと朝の煙

野坡

秋きねとおとゝるけさやきさみうり

林旭

あきゝゝや星も居とわは夜明風

移風

益性の雀鶉をはらゝれゝう鄙

支考

煤風もまゝとよめうとゝうりなゝ

句空

山水やまゝと初あきの香薷散

浪花

いなきゝゝりや鷹のゝとゝやもものさし秋

七夕

七夕や梵論ほしひとて笛を受

嵐雪

ほゝ一合ふ我妹かゝん待か郎

曾良

紡きなゝ死なゝ一ゝとゝや星の床

野坡

七夕や稲のをふもきかゝ星ゝ

支考

土佐う殺ふあふのく人や星ゝり

去来

酒盛となゝて酒のひゝしむうへ

移風

七夕ゝかゝ移ゝうとゝ一指合羽

山峰

不一合や離別の中ゝひて天

錢芷

七夕や馬ゝゝまゝゝれ川の塵

牧童

七夕を笑ふて蓮入る一居れ

立琴

立琴やよるの志ゝふるゝ虫の声

可風

ゝてゝゝや三千ゝふ義云ゝなゝ

希因

銀河

荒海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉

これや見ぬ一夜ばかりの星まつり　嵐雪

西風の南に かゝる雲の川　史邦

とり処と別るゝもやあの川　八菊

五位の声ほのぼのとふるね天の川　汝村

あまの川かきまぜてもとれぬ　宇路

鶺鴒

かさねたるそでや繪入の百人一首　許六

鵲や石ぶおりをは格もあり　其角

七夕や糸に結ぶくは佛のそば　支圃

恋さまゝ頼ひの糸も白ひより　一温

蕪村

千蘭

盆

千蘭を生やかくしまり老の涙　掘西

盆に死ぬるとけの中は佛の自　智月

門並や名挑灯を並べ中　溪石

のけのなりても嬉し盆ちかし　朝三

提灯

せちくの杜にて人松のかゞ　釣雪

提灯ゆきゆきは西へ行　蕪村

せりさいや往来とゝまるあり　摂良

高灯籠

人魂を消てとをの灯籠つる　言水

子に捨てし長者の門や高ともろ　百里

る灯籠ちらくあり峯の月　北枝

ちらちら松の木は間ゆるう那　長皿

燈籠

美女美男灯籠ともうす伝説ありて
天も知る酔ひ伝説の大ともうす
父母の新灯籠ものうる
灯籠の主ものあるかつけ露なくつら
灯籠ハ三度かつけ露なくつら
とほしそれ風ふかるる切籠ろ
灯籠ハ草の長者ろ歩く歩行

おくるを火ふ経ろ者を移ろ
送り火をもろ足のろ
おくりをれ山ものほろや家の数

亀翁　宗因　由之　紋江　蕪村　蛾眉　左次

送火

魂祭

稲の穂はおもうなれ縄ものの
手生ものを田の畦の妻戸のおもふ何
亀稲や蚊を血ふれく花あるく
をもとこ女をもとこ蛍や魂まつり
灸して嘯しも多ろ法明
草の実ハ風の吹まり亀ろ
魂ものをなりく質をおくをる
をものをの名ハ何くを亀まつて
たをまつる宿や入相常なる
魂をおり踊とかき負ふ
山伏や坊をもふ法まつて
をもまつる拝ふ夕ろ郷

芭蕉　嵐雪　鬼貫　乙孔　史邦　徐寅　酒柳　卓袋　調所　百里　沾圃　越人

蓮飯　　湖水

朝飯ふちてゆくとよりの飯　　季吟

蓮の飯　　里山

棚経　　来山

棚経やこの暁の隣御社みの川　　其角

ちな経や世ふけぬうの隣坊主　　燈外

文月やめでたく焼く蓮のめし　　其角

蓮の実の味なれ山の木の実う那　　来山

ゆきはんなを食ふ蓮の実　　其角

蓮ふあり門の左食の祝ちそん　　希因

待ちる隙ふやあれこう取ふあり　　乙由

竹の子は好ふもかうて蓮まつる

墓詣

墓ちしふも孫子とふりて墓まゐり　　去来

銀を罪のくうりやくうりはめて　　其角

夢ふよく仏ふは爰ふ墓ふり　　嵐雪

うらほへや家のうしろふ墓ふり　　阜袋

三浦ふ九十之墓やはうはめて　　乙州

生身魂

かけ借や生精霊の袖ふつ西　　一鉄

ゆきはふは者所のいれそふ　　彫棠

受ふふ死身とふ墓ふ生身魂　　石里

渕明ふ隣ふめやいきみたま　　其角

盆の月

かけても焼火くふしふの月　　蝶羽

おりふ絵と鮨ふいきふり盆の月　　含帖

躍

踊子や　五町　五ふくけむる
をとり子よ　あをい畠の草ぬく　宗因
門ゝ丹波とりて　江口の躍の角　去来
おりめて　紺よ深くほとゝぎす　粛山
食の湯の紺丹生る　踊う素　尚白
けいせんは行臭くなる　踊哉　李由
　　本導

西瓜

あつしとも公はれぬ西瓜哉　歌川
月ゆりをりてあつくる西瓜哉　嵐雪
裏庭や西瓜ふなくふ物の本　曲翠
猪の鼻くゝと西瓜う那　卯七
さゝくゝと西瓜切り秋の風　陽和

暮

火

小屋ゝ　暮火の角は割る音　其角
おのゝきぬひ夜更て涼し　暮火毎　且水
西雲の遠のうゝ　暮火うれ　てふ
追出して千秋樂　暮火うれ　附風
すのくよ暮火おそれ涼ふ　笑雄
ゝふの戸ハ暮ゝ　暮火哉　序令

残暑

ひやくゝと壁と好ゝて　残暑森れ　芭蕉
朝も秋夕ゝも秋のあつさう那　鬼貫
残ゝ　ゝゝれぬ　暑ゝ素　游力
下葉ゝ　ゝふ残るあ門き哉　李由
行くものゝ　ゝかゝれる　残暑哉　夷素

相撲

雨降る夜なきて移ろう角力取　許六
上るあと名も優美なり相撲乙　其角
駕うきやうとのまもるの取おられ　甫山
角力とはあとふ波とて砂場う郷　亀翁
投ぐられて笑顔やさしたをまふう素　勝定
小相撲のまくるのくぐ猪や藪ちうら　尚白
お撲乙のくふふ着ろり蛇の声　木尊
なりけるふ灯の竜うちけと角力戎　朱雀
初秋や親ふるの足ーすまふ乙　来意
おもるけお物うちえくる角力戎　春幾
山うけのう春よゆくるふう素　盛弘
小さくぐとりひと名素角力戎　秋之坊

穐風

秋風や藪もそうけも不破の関　芭蕉
あくれけもまこほろよは秋の風　鬼貫
俳り木の糸をぼるやあきは色　嵐雪
十図ふも小粒よなりね秋乃風　許六
ゆうろこ跡ふも三えをあれは風　初候
雀ふは鬚もうゆむや秋のうせ　式之
焚くその食はあほひやあれは風　李由
ちくーうもや穐ふく風の裾ふひ烟　四睡
渋壁ふゆとふ秋はうりは秋のうせ　程巳
草ちりの裏めうふーやあれは風　北枝
木の股ふおちはく鳥や穐のう素　曾良
ちやかくと足をあや浦りて秋は風　沙明

早稲の香ゆり衛へまり燈の風　湖雀
秋風や我と板戸はしらくおと　岩翁
輪義のわくりちらや秋のかぜ　毛紈
秋うせやニ歩くゑとこの福させ附　游力
あきうせやまつ四五人は杉乃先　汶村
秋の風むしの声くあわせまア　乙州
夕くれの實をかくあくりあきの風　野高
なき風やことし十五の子ども吹　来山
吟酒を止まる人きしあきはら鬚　言水
あたうせふ耳の垢とる波しず　去来
秋風や草を食れく馬の鬚　希因

月入　負室
扇置　百人
捨團　横船
初嵐　宗因

風ふ月の入るくの久方の空しの郎
ゆこしもや秋空高くなる日より
くせとても常なる妹のあるきうる
笑書もつるはるのなるる我

源草ふ秋も仕入れる国扇うる用　嵩角
捨うちふれしあてあうく窓のあ合　浮流
くくあくじ笑とも音し栗の毬　芭蕉
初あくぶ鬼は毛並あるりまり　箱深
あさ晩の腊ふむうるや初あらし　珍項
辻壺は鯉ひとくる絵やうり嵐　野坡
ひくるうくく水のあるや初あらし　治德

露

素堂

鬼貫

来山

言水

其角

之白

嵐蘭

雪芝

酒邑

千子

蕪村

霧

俳の数入

二百十日

其角

清岱

楚常

芭翠

毛紈

野紅

舟行

素堂

李由

昌下

稲妻

あの雲と稲妻と待つらんかの
いなばもふる大佛拝む野中の角　芭蕉
稲妻や おさへくくしたる空　荷分
のなばなのつゆとて落るや山はな　野坡
稲つまや海のおりてとひふめうと　丈草
みるあまの馬引かくる田面う那　史邦
いなばもや周の鏡のかけ人　侗梨
稲妻や折〳〵数のひまう見　氷花
いな妻のはうへくく房ほ戸数ゝる　湖風
みるはもや地まはるる雷の圓　柳子
稲妻やちはは〳〵ゆるせる城　卧島
いなばもふる行老くの小家ふる　素洗
孤白

野分

ゆく〳〵へなき雲ふ組しく野分ふる　未山
日枝高く吹かくまほ〳〵ゆるき我　言水
まるまるあるねちりく草の野分ふる　立志
野分ふる雲のうちきや乾ふみ　探志
ふるさしのさりとりとる野ふ代　正秀
おのつゝら草のちるく代野ふ我　圓蕚
餘おの吹りまのさほあく野分ふ赤　琴風
ちちやふれ野ふの朝はていふく　紫友
冷くと朝日ふ見しる野ふ多　支考
鶏の尾ふはふれふ野ふきふ　前口
河奴を野ふるあ井塩ふ死おふ　圓水
吹　ふるや野分はあしくまこれ　之順

早稲

早稲の香や分け入る右は有磯海　芭蕉
子稲干すやくんだてをむる山のあし　去来
何畑かかくれ白ひや早稲のそる　牧童
てせのうめや田中をゆけと弓と法　支考
久暮宵子稲ちのひて人ぞそそ　松嶽
臥しほを告ぐるや早稲の舟多　負室
早稲の香や鹿ひ出さるる菴は舟　丈草

落穂

落穂拾ひ鶴の糞を拾ひみる　魁貫
あち穂ひろひ日あるる方へ歩むり　素村
辻堂へ投げゆく落穂の音　青角

木綿取

後引や琵琶ふのいきむ井の奥　芭蕉
簑ふ不ーて窓ふとちふく綿は樹　孤屋
里の子と曇ふくふし居ふ木綿ぶ　湖水
新ふふうやうふ散ふくあやとり　泥燕
日あふりや綿とりまるとふ簑きて　富豆

田刈

稲刈やその田のそしやの武所　許六
傳奴足の跡のみ多ー刈田ふ　何之
目ふるー稲刈未は浮調義　操青

晩稲

晩稲田の穂ふるるうやあ海
あらとーて案山子ぬらける晩稲ぶ　遠水
蝶夢

佐久さ石

くしきみ箱さらかくしとそ新や司石　山店
拜ととて烏帽子落とそ司やし　太祇

逆峰入

七夕清ら傳都かけくらり逆の峯　淡く
峯入や雲とまんもよ登ちらを　汶上

後彼峯

彼峯さくら咲ら月こそ西まあ色　宗因
陽もなし秋の彼峯の幾風うし　鬼貫

初潮

初潮や細いとこそよ帆うけふ孫　嵐蘭
ら川ちしも驚くけるに儀衆我　和及
けんら汐や小松の中ま月の新　乙河
西〜ゆる追られてのゆる小魚我　燕村

八朝

八朝や二日の日ちまとくれとと　宗因
八朝や閉れ幾佐ちに横くふ　乙州
八さ〜や耕れ鞍れ〜ちり是川　野坡
八朝や踊つこ足なかしこ生れ　乙由

弱近

まく〜や清ちかとふるこはむ久　コ斎
ちうめ中る函谷や〜ふ跡馬連人　其角
蒼笠やことふ目ふ〜ふ駒むく久　秀風
弱ひうひちとまゆ〜〜や額ふ　燕村

駒牽

駒牽の木芽や出〜〜三日の月　去来
京笠を皆こ法初きの戻りうす　浪花

放生會

桐雨　史邦　露川　鬼市

うれしけれ羽兎とるるより放しとそ
海老稲も実入り頃とや放生會
人とうろうるそおつのり魚とかつ川
先いろの獺ふ達へとやそおし鳥

案山子

玄来　諷竹　呂湖　重五　惟然　雲口　光山

ゆめまいといふろ案山子の腰刀
はんりと刈しる跡のかくしる
えとうせい生ふてあるかし哉
山畑の案山子はうて笑ひそ
ちるえ人ふなりてつかしの那
物好き音ハ為ふ春ゑ獺とかくれ
まあ〜代いろてまるハ案山子哉

全峯　如泉　卯七　和角

そのさるを後田守らねかくしる
世の中にうえて引る案山子哉
一ト夜さもゆるして森せねうしれ
ちうんほりと山田のかし附西ちと

鳴子

言水　其角　野坡　乙由

鳴子曳二日の月もちろう那
七十のこもそとるなる子ゑき
是酒の敷ろ門田の鳴子ひき
なる子引おのろ是森をおとろきね

引板

亀翁　薫村

山はくき日の出れ虹や引板の綱
中ま蔭や浪呼子ゑるひとこれ音

落鮎

村くの森こゝろ交ぜおとゝ　芝村
小山田の雨落と日やれとゝ　太祇

渋鮎

長あしと市ゝ鮎の暮のさび　杉風
渋鮎やいろと栄は藁のゝ和　寛満

落鮎

落鮎の水よあうはこうれ世ゝふ　勇松
追落と鮎のよとみや石のあと　横几

初鮭

鮭の附宿と豆腐れ雨夜　素堂
ゝゝ鮭と流居も客とゝれゝ　寒玉
きゝ和んてさゝ波のとゝ川辺ゝ　国木
ゝ鮭やかゝて荷物の宿ゝふゝ　伯徳

菊衆

ゆゝくゝと煙のゆゝくゝやゝゝき衆　乙由
ゝの衆の奥ふ後ゝゝやゝくれ衆　太祇

すゝ

ゆふ雲や雨ゝ多み茶体鰹ゝ　野坡
きゝしゝゝ府後ゝゝ沼ゝゝきゝ那　昌長
せいと沼ゝゝもあゝゝしゝゝ沼　半残

河鹿

あやまりてきゝゝゝあゝゝゝる河鹿ゝる　嵐蘭
ゝゝるゝゝゝゝゝなき出とかゝゝ永　園女

沙魚

袴ゝくゝゝゝ沼ゝゝ非ゝゝゝ南　巴山
粕買の駒ゝゝあゝゝゝ流ゝ沙魚　朝雙
四ゝゝ舟ゝゝ世買ゝゝゝ月見川　菊白
沙魚ゝゝの小舟漕なれ窓の茶　薫村

歩市

二ッ買欲をおもたて歩の市　一嵐
むらしくれし遊女あり逢ぬ歩は市　作者知
市の月さゝふ九合の月もなし　涼佛

新そば

新そばや夕紅行映を笑ふこと　支考
もん蕎麦や名を通ぶ唐辛　夏晴

砧打て我ゐきうせやゆ坊ゝ法生　芭蕉
おりしめまり恋る名をうつ碓うね　鬼貫
相槌のうつゝふて明るきねこう有　山川
きねこと打人くも裸くらまれけり　鋤立
蚤掛の紙ふりをさまるときねこうゐ　去来

擣衣

鼓かちきぬさかくたゝあるのおと　仙化
うつる馬は拍子ちがうこと砧の素　巴風
藤かくして遠くなりうるきねこと　破笠
旅人ゐ村とことうる表ねこう有　全峯
とのはたりなくさみようりきねこと　一笑
山里の砧やさふく常くきうる紙　是吉
生柴をちようくさせてきねこうる　千川
夜ちゐ起うく酒のむきねこの邪　昨應
さびしさゐ寒月おりやゐ砧れ　孤舟
うつゐゐかくらぬ市のきねこ哉　立志
紙ちりはく現ゐつよききねこ此　七里
三日月の藪は道の表　憩この有　万声

漸寒

やゝ寒し　早稲はひらゝの角芽立　野童

足くらやき朝戸はおそゝやゝ寒さ　北枝

やゝさむく人をうらかふ秋さうの　乙州

朝寒

朝さむやゝをとりみそめて葉の色　風斤

あさぎゝみ酔のまぎれよりさゝや　北枝

初寒や関のゐふきのひゝく声　蝶夢

病人と清水ゆ森ゝ秋寒う来　丈草

落戸は夏のうさゝる夜さふる　許六

松うせの新酒をまゝと秋寒し我　支考

ゆく多ふゆ猫もかゆゝとよをぬ　甚角

夜寒

落て夢さめてまゝ泣秋さふう来　東山

あてもなきゝゝを夜寒のおりひゝれ　諷竹

掃はゝゝのいろりよりくる夜寒の角　秀川

まゝ一生荒ゝくまでの秋寒うれ　仙化

秋寒さや庵寂ひとゝふまうれゝり　百里

客人の夜寒おゝ法ける秋寒くる　程巳

打鍼は音やよさふの障子こゝ　汀芦

まゝとの里寒川う秋寒の火打我　其流

ゝゝて月もなゝゝる夜さふこの角　蕪村

木はくゝふ鼻紙ゆる夜寒う来　風麥

生壁ゆ袖を氣はたふ秋寒この那　李由

新酒

新酒の秋をしそおりふ明石米　宗因
早稲酒や稲荷ふる山を姥うりと　其角
風と名の付く吹よりもん酒うる　その
彩さけは志るしも青丸月見の事　酉花
玉稲酒や禿倉ふかけし牛の筒　虚谷
新酒くむ少盃ところなり砂はう人　亀翁
松の葉も紅葉とろりて新酒うる系　法九

露 附雨

袖はまふりろ且し雲や露志ぐる　嵐雪
菊の香はりのよはく日や霧附雨　希因
爰ちのいまやとくいて露しぐれ　涼佛

秋 空

秋雨や御簾割きまくこの指篇し　故風
さらさらくろのうねる陣ふく秋の雨　野坡
烽のあめ鶉はは尾のちくりまり　孤衾
松のちあはは地よ立ちくふ秋の爰　丈草
あきくさめやちく底の茅を階渡る　蓋村
秋はは爰胡ちの系なる絲ろ水　曉臺

穐のそら尾上の松ふとあれさり　其角
樫はは木のちくもきらきらの秋の雲　支来
絲くりかたそくにて走はや秋の長　丈草
風の根を照はけくりあれの空　卯七
上ゆくと下くる雲や秋のそら　凡兆

籠の霜

芭蕉ちるやまさきの秋の霜　指善
うとゝあき蹈のかしらやあきの古も　史明

長き夜

九度起くも月は七ッこの事　芭蕉
ながき夜を抗氣弱の祈りて猿寒れ　鬼貫
秋ながゝの長さ成切をとこの山　丈草
桑のこゑ秋もなかばの猿はこゑ　北枝
ながき夜をつゞる秋長き成くゝ成　沾德
栗稗を夜長ふくゝ人秋こゝ身　野徑
腹ながりて秋ながき夜の秋や萩の声　怨誰
なかき夜をむしふ成ながる源森成　草土
おもきよや剣の声も長根者　蝶年

妹の暮

この道を行人なしふ附れ夕暮
あ笑ひ暮祖父はふるこの子のみを　芭蕉
舟多ほ宮島の秋は夕ぐれ　甚角
癖ふなりてら見ゝや秋の今附ふ　嵐雪
ゝ従事尋ゝ称よりその秋の暮　千春
蓼の穂ゝひとりこゝれゝ秋はこゝ　玄梅
あきのゝれいよゝくゝるゝ秋はこゝ　程巳
馬牛は脊もさゝきれゝ籠の昏　荷兮
ゝゝ稗へいかもあれゝも秋は海　松留
あきの宮留ゝ法ゝのれて塔りゝ　岡友
人を住居ゝりまゝゝ秋は昏　山店
秋はゝゝ合もなゝ舟遊山　楚常
　　紫紅

柿

昔やゝ今やゝ落ちぬあきのくれ　鬼貫
穐ふるくさしき炭の白ふる　昌碧
石切の音も冬ぞ秋は人を　傘下
谷川や茶袋ゝくあるのるる　益音
僧の居は穐のそゝれよ秋は昏　不炊
鳴弦もあきもかゝらと穐のくれ　車庸

柿ねしや柿を迫なあゝしなる　玄来
帶落の柿は音きく除心なる　素堂
弱柿や障子ぬれ夕日の日　丈草
柿はるるりをを子供のとゝ雀　利牛
供柿のつゝまり枝の住居の家　亀翁

葡萄

月日は栗葡萄かゝれ甘露あり　甚角
酒仙は義のたゝきやふたゝび柳　史邦
柳ちるたゝかの淋しき葡萄うれ　仙老不知
さゝやかなゝ人をゝる姿ゝうかれ　村瞰

梨

今霄うる梨の帶とく男部屋　沾徳
青梨やうゝ人ゝ秋の水　曰圃

茗荷

かけゝをを小盃別ゝ茗烟艸　亀翁
辻ゝへ市日ゝ別ゝ茗ゝ彩　晩山
若たゝこ既ゝ一ゝの庶と彩り　亀世
蠱ゝ下茗床しきゝゝこゝな　芝村

一葉

水の脈一筋あるもちろくあるもき　甚角
すゑる秋のきりきりころころる一筋ふ哉　そて
角文字ハ相の落しこ体二筋ふうる　甘泉
相の筋やあるこころをまふ屋体　苔蘚
庭掃くそはくひくこと一ふふ　風徐

柳数

座をいて出るやちふちる柳　芭蕉
月初とり折ちり残る木の間より　素堂
主すんまの用意や数りあるき　桃隣
行馬の筋ふもちふ素こ井　李東
さくくきくや花井殿ゑ数る素　嘉中

仲の花

七草ふ酢味噌のうるそ秋の色　吉水
仲の花ちりて老毋筋のこなりうり　東滝
秋ゆゑ一人切ちまは草のそ形　風國
草ふ花秋ふ燃となりにきり　曉臺
我ちちよ咲てもちし筋の也　五瓶

女郎花

ゆうこうよ酒は後のをこうくし　鬼貫
けふほ一の賀ふ花や女郎也　杉風
女郎花のところ筋ふるふくほ　野童
松風の里ふ汐くあをこうくし　漢口
はちふくこと露けし層ふの女郎也　乙州
ふこうこあをこうや岩の女郎花　秋之坊

木槿

道のべの木槿は馬にくはれけり　芭蕉
むくげ垣花見えつゝに藤入まで　観水
それくしと木槿の花はころり咲　土芳
川音や木槿さく戸はまだ起ぬ　北枝
はなかゝる里は木槿の匂ひかな　四睡
一くゝり草紙や干はむくげ垣　素牛
りんの間に脊戸の木槿は咲なくへ　如柳
手情する色の絶は栗や木槿垣　見寿

蔦紅葉

布に裁てあまりをさらう蔦の杉　沾徳
おちかゝし谷をかくすやつたの花　桃隣
散かゝる花もうらみね蔦は西　北枝

荒尾花

荒尾草のしるしも御名得久さし　鬼貫
みをたまくや夕限にえゆ涼醐　其角
荒尾草や君はからかさる柔もよし　曉臺

藤袴

夕日さすと簾をあらし茂えまま　裕兮
雨のあしらひやむらく藤袴　一武

曼珠沙花

かなしさや猿のなきに曼珠沙花　其角
悲死なく契ふみえしまんるさき　才木

男郎花

黄昏を海も見給ふ男郎し　麥志
秋の野とし一人の名なりをとこへし　半睡

朝顔

あさがほの酒盛ちらすねはちうかな　芭蕉
朝顔や人や糞帽子　甚角
藁やよりの藻の結び目　去来
知る人の白きを露もこえぬなり　荷兮
あさがほの赤一輪ゆなりふるまり　舟泉
なのさうやや霄社設弓の焼わらり　呂房
朝がほや横丁垣の這あまり　杉風
藁を笑ふくくをあほをあほ　北枝
あさがほやきのふ五つくふを三つ　牧童
朝顔の屋よのとりし鶏は声　其糟
なのさうほや磐の日新の今ことし　畝足
藁をくやうるせ物る夢くさて　山川

芙蓉

あさがほや初くこの水ゆ残は月　胡及
朝がほや虫ゆくらはる笠の運　未山
藁の稚ときの蓉の茶　一笑
枝ふるこの日にくかをれ芙蓉ふる　芭蕉
百合ゆる芙蓉を絡るいのちゆ茶　風麦
ちとあふゆ小刀もあり玉芙蓉　沾徳

海棠

まぬくひゆ紅の仕くや秋海棠　支考
秋海棠ひるを絡ふ人ゆ　素浅

秋木瓜

秋好の妹をふの絡よられ木瓜　韋吹
ちかんとくく手草の中に秋木瓜　路通

萩

萩雨や一夜ハやらせ山の犬　芭蕉
答とも見えず庭ハ萩　其角
蓬雲のあるもうるを萩のうしき哉　土芳
朝露はうちふるとも萩の使ひこの京　その
萩さらハ庵のかりほの雨ふれん　来山
萩ゆゑや蔦の子あらふいとを水　牧童
庵園の蘇やかりあると稲の端　猿雖
そもそもうりと此野のみありうれ　忍市
ユーふ庵ともそえし萩はな露　車庸
萩よ来ゆく立ハ山ひくき雀うゑ　西邑
村雨や萩の根ゆあ新蜂の声　冷袖

萩

蕎麦

萩の穂や吹をはうひ風生り　芭蕉
友とよそれ扶も文車の萩のこゑ　鬼貫
雨ハ日や蕊を蕊ふ庭の萩　卧菖
あうきの造燒まゝ萩乃ハ繰　岩翁
萩萩や春の季なるハ梅さくら　貞室

蕎麦ハ寒ハ花てすてるを山路うる
やうてうよ棒くらせんそはの花　芭蕉
孤火ハ寒ハけてるや蕎麦ハなな　宗因
暮ゆくて盛うせけりそはのとる　荒雀
くん蕎麦やう思ハ酒の木芽大根　西汁
　　閤如

稲の花

あつさともあのさはけるり稲の花　游力
七夕の花のはしるやら稲はなと郷　智月
品川をとまれてきくしら稲はなる　峡水
吹ふのぬ風の目まくや稲のうれる　巳百
蜻蛉の立居ふ穀りねらねは花　遥里

番椒

そりこ衣も紅葉しにそり唐うし　宗因
番椒茄子ふあけもうをハれを　来山
そうこ豆の蜻蛉のやとりや番椒　未竜
玉虫の羽いさいけやたうかくし　探志
いとうたくこそるものや番椒　野坡

糸瓜

佛ゆも花ゆをと剛ほゆ糸瓜うれ　鬼貫
ちきしまやゆ糸瓜の糸ゆ捨くうれ　南甫

瓢

針立の撫く這入るふくをこの青　許六
森をうくや起とうも青蛙へ　季邑
ふくゆく黄瓜ゆ嵐ゆ紫　亀世
そりゆくを音沈待を佛ふくをれ　土芳
そしたのそうくゆ西のき蛙をうる　風草
夕都の花ゆよふねふくこの紫　秋及
竹の声許由うひさまいうと青し　甚角
蔓ゆをや僧をとく落る瓢この　希因
頃れの目皇かきゆくふくゆ郷　蕪村

草

蓮の実は花はとひしりとりもさまてくさとは實や風もものくさとさてさた　嵐雪

百里

蘭

らんの香や深の翁ふくきこうのを　芭蕉

盗こくる蘭や五食の餐の下　嵐雪

秀ふくれ田のうの野下志まを蘭　宗因

よるの蘭夢ふかくまてを白　蕪村

とせ

秋風ふ巻糸折らくく芭蕉うは　凡兆

きくふくれて芭蕉のかけの小信哉　遠里

家こ田ーなるる座のうを白式名　園之

雪雨ふ枯まてくく芭蕉の葉の角　伊村

花

世の中をかうてのん花降うを　胡故

ふくかくね風ふの花世のきこた名　浜熟

咲風のきそくく行如野の南　卜志

馬道もしそ引こ咲ふ和の多　探泉

山伏の火をきうこを花降名　野坡

いきあくく牛のようなる花世うを　野径

桔梗

野あそしや花さり衣きき毋り笠　德元

秋行くくちりこむ桔梗の蕊の茶　左次

村雨やこるくくちりこむ沢桔梗　我常

桔梗ありこのあれ花を立ち佛堂　芸村

薄

角文字やいせの野飼のとゐ芒　甚角
燃まれてく雪燭をなつくほ芒ゐ　荷兮
寂さゐてもおきてちらつかう萩薄　路通

紫苑

花さそふ戸ゆさまれし夜寒哉　牧童
抱おこと雨のさゝき秋さそふ　苔嶺
穂芒をさそふ絡ふとゆや畑の畔　芦本
ゑつくと目とさそひう蔦ゐ有　野坡
おりし捨き鳥ゐ入えゐ蔦ゐ有　鬼貫
まゐくたゐ人ゐみなゝき芒ゐ那　素山

野菊

野菊ゐと折くゑゐと蒙苑ゐれ　笑林
なゐゐしき紫苑の下れ野菊ゐる　蕉村

重箱ゐ菊なたゝきの野きくゐる　甚角
きくまくに咲まゐ那菊ゐ有　句空
明道の野きくの果を湊可殘　柳宴
菊州道くゝとゐと那きくゐ那　露川
松ゐ根ゐ多代をあやゐ保世菊哉　永参
根を石ゐこれゐ川原の野きくゐる　亀翁
角石を拾ひのこせし野菊ゐ有　尺州

鬼灯

鬼灯やむとゝ蓋かくと娘の子　杏水
ほゝ清きい傾城のふく網子ゐ　進寄
うゐゐ笑ゐ鬼灯吹くや猿の貝　伯荷
鬼灯や清水のゐゐ生ゐ　芝村

鶏頭

鶏頭のひろをうりけるや金まくら　文草
岡寿を茶ふもるこゝね茶ふ鶏頭　史邦
茶をとり日とゝ殺ひけり寂頭花　野坡
雞頭や紅錦の表まま居　林風
夕くれふ仏を敬ふさん鶏頭花　安信
鶏頭や唐のかしらの夕日こうこ　亀世
雞頭を焦うてふやうの角　文鳥

蓼

茶もうゝ佐野のあうりの蓼屋敷　其角
盡ゆきをを當ひうり蓼のゝ那　琴風
捨鞭やほうりもさもるたゝ乃茶　堤亭
三經の十歩1ほゝくあてのゝ　芝村

稲

稲雀茶の木たゝりや逃ところ　蕉雨
い祢う川く田ゝ出ひうかうあね我　凡兆
夜ほ夜や稲ゝく家のゝふゝ声　刀乎
稲喰ふ高次ちゝき川ゝの南　横几
ゝまりく稲ゝりゝ寄もかゝりゝ　ち祢
稲村の鶴をゝゝくをる雀ゝ家　狐屋
い祢といふ名も手まかゝゝや妹ゝ門　史邦

藨

穂

一本の芦れ穂中せゝぬせきこの茶　防川
引寄の跡ゝ起ゝうは穂芦か那　全峯
ゝしの穂ふ暑うゝ方や岩の脂　去来
芦の穂や鱠を中とひて折もせん　其角

尾花　菊

なる袖や尾花の袖の後とこそ　重頼
白玉の尾花紅くなりぬれさらぬ　桂子
さく波や穂よりいでぬ先の尾花川　貞室
山伏ふ鼻うまれぬ尾花哉　東朝

起ゐうぶ業ゐのめりかなり水のあと　芭蕉
業をきる跡まろくあもあり　其角
雁の声業七夕のなりあこの業　嵐雪
きく愛くあ根のかさりや山畑　去来
棚下にのゐ多もや業の新法師　許六
菊をうり奥ある秀の曇う那　杉風
梳かくの見ぶれ信居や業の爺　李由

元来やほ〻と岩根のきくの行形　貞室
御定の外うやきく社まうさり丸　宗因
行馬はあとふ尾形〻業の業　鬼貫
酒うまふよたる彼うや菊社尾　梅盛
業畑先へとくむとあるこの形　正秀
さりふとに垂く妙へるや屋の業　幽霄
百業も愛くや茶の写社南向　嵐竹
ちふきくのえ而ミメきタをう和　諷竹
塗物ふうろふ新や業のそな　本導
菊の秀よなくや山系の古上戸　北枝
きくへ粒とてし佛のうてかゝし　千那
業の手つや古紀雑彼の春ゑとも　千川

未枯

うふ枯やそれとも見えぬ赤のふ山　毎閑
未枯や魚とくみめふそうけ中　雪子
うらうらうつつや見つ廣そうか門の桶　青峨

烏瓜

保戸ヶ谷の夕日やそそる烏瓜　亀翁
市人の声ゆもあらをかふと瓜　柮堂

葛

葛かくれと夢そのうちひや牛の蓄　野坡
葛の葉ふや見売ふふ岩北間　卧高
石山は人ふも葛のうふおりて　乙州
葛うはくふ月まと足ふね桃ふか　里東

梅のとり

ちらしとうや温飽ふとくの梅のとり　之道
ふのよ多ふ人ふとうおくも梅をとき　乙州

ねうこ

うこ玉のねうこふ角やかこふり　專吟
朝うふやねうこの蔓の法とうれを　及肩
うこ玉はの蔓ふ余りこるねうこ北　蕪村

芋

煮てる高野山ようしてし芋　宗因
芋も母寒の入るそそ三日の月　鬼貫
いもを捜て西をきく風のやうふ　甚角
秋来てもそ生まといもの蔓　西鶴
芋を抱く酒ふ対なけくふの渕　桐橋

男郎花

刈萱

木槿

木瓜実

間引菜や有とはわしの蒔ける　曉臺
まびきなやはあそおりふまれ子を　一邑

刈萱や露のうち新の草はふ一
かるうやそあふしは跡もよろうろ　牧童
　　巴丈

木槿や六尺四人かくもうを　其角
りくせいの花は宜こるふね夜を代　爲有

賣毒の一樹出来ぬよりはかや　西雅
ちもの朝植櫨の実はこれそれ　杜國
きびしさや吉野をかをやおりの村　桃隣

椎の実

榎はの実

栗

用事のしい椎ひろ里の松原より　其角
好をるうこそねや椎ひろ折　三翁
村西ふかひあるうけや椎の音　岩泉

下紅葉榎の実をとるこそ白し我　其角
実なるより油ふはりの榎木此　路通

生栗を拾ひはるる山路哉　其角
毬栗やまふさこけるる法の場　嵐雪
栗のあるべきものの栗の上　惟然
落栗は蓑好きかくの嵐ろ那　透雲
毬栗の笑ふも淋しい秋の中　李由

熟柿

紅葉

木伝ひて完然ものあり熟柿の事　丈草
小上戸熟柿の林かくれ去り　一蜂
葉の時くさるまで落る熟柿哉　百花

山姫さくこること表やちらす紅葉　其角
白くふりみちの外へならぶの町　鬼貫
ちらふね人とりのいひてくるる紅葉　東順
肌きし仲切山のうとそそみち　凡兆
りみちこそ火打もうつを深火縄　野坡
山川もいほりかくしこ紅葉の雨　如柳
公あんて指ようりみちとちうせちり　秋之坊
ちりそめて夕日春雀ちらす紅葉　野童

茸

茸狩

松のもあるそめ火まつりの薄紅葉　紫山
ちち木とるおほしめされを榎茸　其角
柞落ち松茸こそ白ひの茶　嵐雪
松茸や囲炉裏の中ふ柱ちく天保　貴児
ちり茸の裏より朽ぬ日蔭ち形　園友
まち茸や番をもあるして良ちちく人　沾蓮
紅茸ふ州野の比丘尼なんちちや　為有
ほり茸や大きるる声はなちり夏　木導
茸かりふ日いまこと高し岡の杢　吾仲
たけうりや黄蕈も児ハ鱗ト良　水奥
茸うりやくふとちる鳥は先　利合
去来

虫

蟋蟀　鬼貫

今宮の虫とて後なり法師ほし　来山

暮ふかと芭蕉ゆゑく虫の声　許六

黍稗の売もくさうやむしのこゑ　壺中

むしの音や関宿舟の桑桑の中　養浩

焼明まむしもよるや比叡の法　藤葉

虫の声や木綿布のわとくるま　汝村

五根まくら暮ゆく虫の声　李山

生れ法く草のまこうや秋のむし　支鳥

蟬の音や株ゆとせ桑の日はうら　汝村

うら秋は良のあられやのとぶ隙　楽峰

蟋蟀

蟋蟀ふ角のゆうりと黒き懐　万子

ひろくよとくまくて秋の小ちゆ我　牧童

あきの懐一筆ふと散るや髪の中　桐

秋蚊

秋の蚊や血よ吸ゆれる酔ところ　粛山

秋は蚊や友の減のを法はうり　只言

蠅

蠅打をまくと捨ゆるうり浦のあた　泥足

あきの蠅くふ高せね日向ゆ　史邦

秋の蠅ううを　むやく足せくを　秋之坊

秋蛍

秋の蛍二夜をくくて窓ふ　蠟灯

月は夜をちやくくね秋の蛍　樗良

松虫

松むしふきうの花をうれしがるもしまうむしと跡さたなるる新うの家　其角

虫をとりるめとうり呼よけり　車来

まつ虫の昼夜ハ松の白ひうる　一髪

沙明

鈴虫

鈴むしの呼りさく時雨夜うる　季吟

さく虫や松明先へ蔦させく　其角

鈴むしよ客をかくさや遅り様　凹凸

蟋蟀

猫よ食はしな蟋蟀の妻ハさそらく　定角

蟋蟀やかうらうさまんく小半月　荷菊

我宿のとうろきをなく鄰う角　白里

蓑虫

蓑虫の家前しくれ野分うる　句空

みのむしは峰て枯木の風情うる　淵泉

蓑虫を千種の蓑ハ花かくしうる　鍋立

うめむしの蓑ハ雫や草のはめ　史邦

みの虫や味ひうるしと呼ふまり　芝村

蜻蛉

山の端をみんまかくさや破れ笠　其角

蜻蛉や追うけてゆく沼とんな　汀雨

幻の秋のゆくへやあうとんは　支考

蜻蛉ハ来てゐ魄とは笠の中　丈草

とんぼうの鳴をかゆる夕日うる　沼荷

蜻蛉のはうとねけくる廊下哉　斜嶺

日を斜関西の縁にとんはうる　芝村

蟋蟀

床わすれいひきふいるや蟋　芭蕉
きむ月や鼎を立るまりくと　其角
灰汁桶の雫やみけりきりぐす　凡兆
やせ〳〵聞れば声もかすれて蟋蟀　智月
秋の夜や長と新ときりくを　水颯
ちまち〳〵や先人寂くみる蟋蟀　李川
引手つけて羊に首ありきりくす　乙州
あの声や露よむせるきりぐす　従吾
貴家のあいさつきりぐす　蕉
なく〳〵聲やひく〳〵あるの蟋蟀　范字
きりぐすの穴もるときりくを　車坊
常燈や襲あるうたきりぐす　丈竹
嵐雪

竈馬

蟋蟀

秦山
鬼賀
舎羅
希因

越人
正秀
惟然
程巳

錢芷
北枝
凡峯

外よりあれゆひうきれくる蟋蟀
古城や夜くろなるあるりくを
さびしさをさそひよきころ蟋蟀
居風呂もりの入れくあり蛬

竈や竈馬塩ものの猫ろまく
情生さや月の名残を嘶くいとく
磯際の浪ふ嘶入ぬいとう茶
食のこと柚味噌の釜はいとうれ

かまきりの鎌はひまり露の玉
隣郷や家引のこと萩はそ那
うまきりは鶏ふ又むうふ姿ふ茶

蟲

秋もくれやくるしと鳴く蟲の
川株ゐ足引くゐ[illegible]いゐとう系　風國
二条ゐなゐ青田ゐみゼー蟲ゐ邪　溪石
曙ゐ尺引まゐ[illegible]むいゐとかゐ　雨柏
綿の蓑ゐ巻迄らゐ蟲の角　為有
門の戸の蚊帳ゐとひたくいゐとゐ邪　昌房
伸風

蜩

日くらしや捨て蟲くるゐ日と　もと
蜩の声そゐみとの親のはと　孫五郎
ゐくらしやまゐ人れゐる爪ゐ　涼岱
ひくらしゐ松原ゐ倦ゐ蟲ゐ　其梅

渡鳥

浦波や通しも交ゐ[illegible]ゐ　玄来
山陰や渡り侍ゐる鳥の声ゐ　太草
日ゐ西ゐ西のゐ[illegible]ゐ　野坡
吹息もゐゐ附ゐ[illegible]ゐ鳥　游力
聲ゐゐ小ゐゐの中秋渡り　迂之

小鳥

秋の野やゐくゐは小ゐ邪小鳥　虚谷
板葺や秋の小ゐの歩行音　落梧
小鳥ゐは音蟬しゐよ板ゐさし　蕪村

鶉

榎の実敷る鶉の羽音や朝嵐　芭蕉
ゐくゐとゐりてなゐと鶉の羽音ゐ邪　一保

雁

酒買ふ人ゆくうの両夜の雁ひとつ　其角
ゆくうふゆくうは浦は名ぬ我　馬莧
ちりぬ川ゆ新ちりぬる茶湯客　風國
起くうくて夜明人なし戸のあるを　方平
ゆくうは雁も雁川うふ笑いかくひきや　越人
初雁や比良く追ふ帆うけ船　木節
行ゆの友は法ゆくうゆ奥の柳　惟然
ノの行くうるかくゆや稲田の稿　北枝
鳥帽子ふて白きりの皆小田の雁　嵐雪
かるうは雁の年ふなは付程鶴　夫来
ちう雁ふ行灯とはあるはくうりと　落梧

秋　二十九

鶺鴒　鵯　四十雀

せきまいの足のとかはしの霜　芭蕉
いるはきまふ鶺鴒の尾の契りふ　史邦
せきれいや雲土とはる畔のうへ　磐盤

虎ゆもうまとふ鵯の草鞋うふ　嵐雪
目を縫ひ百舌ふるも書ひ法師の声　歳人
鶺鴒や木ふ屋ふくれくまひぬと　露川
此森もとかくるとまりりをおとひ　薫村

老の名は北ありとも赤ふくく四十雀　芭蕉
世の中や流りくふふて四十かから　虚谷
かひとけふはてさくまりは四十雀　可吟

鶉

相の木ふらぬ時なく時雨の内　芭蕉
伏見あの町屋のうらふく時雨　去来
日あたりあせてうりあるとき鶉　正秀
馬夫よりみちくれてなくらはら　臥高
うの鶉時計の六つもうせぬより　史邦
ゑく雀ふ夜を待あるとき鶉　山店
旅人の小判をくはりるうはらうな　園友
栗は穂をこえあくはは附や時雨　支考
中為も落舟て時雨くらはるる形　露川

帰燕

燕もも寺の太鼓かくれ　甚角
菜屑もとゑさとゑるつくるあ哉　原伴

鴫

刈あとゑ早稲うくの鴫の声　芭蕉
石打て立ちゑ鴫ふあくれ　言水
あくふうの姥鴫とらふるなるる　亀洞
鴫突の行衛長き日あくくふ　児竹
泥龜の鴫ふ這ふ夕ゑ郡　甚角
鴫細ゑ風のあくくれゆあるる　湖舟

鴫

鴫の行方うくれて山女の赤
ひよくりゑくふの日和をはくる声　李園
　　荻子

鶏

居りあくふ河糸鶏寄る小菜畠　支考
高土ゑに鶏の帯日や雲ちきれ　琢碩

鳩吹　野水
鹿笛　珠頂
鹿　甫山

淋しきは鳩吹ふくとりの音
鳩吹や微横糸の蕎麦そばけ
そとふくや太山いくつきを下る

徒元

鹿ふえやそもを狸のたらつてみ
うゝなりて鹿ま笛ふくさんろ哉

大山

小男鹿やあるきき声より此流を　其角
啼鹿を椎の木のつるふえ身をそ　去来
北嵐峩や町をうち絶鹿のこゑ　丈草
朝鹿の身妙なひ高ゝ堂は様　許六
鹿の目れ初日にひゝる高根うゝ角　李由

あるれさや日の照る山ま鹿のとゑ　万乎
番の火をふもうふ鹿多や鹿の形　探志
行〳〵て道なき鹿の苔向れ　不障
さひしさや尾うゝうゝる鹿のあり　木導
鹿啼くやとゝと波うゝ声は跡　野坡
元山の杉をえんせきり鹿のたゝ　知足
尾をほるなくや夜明の鹿の声　風瓶
かんせるゝ四足をうゝる小鹿こゝ那　汶村
力をそひとふゝと歩きや鹿の声　蘇葉
膝えんせをはくふ鹿より水たゝ　半浅
吹うゝに鹿をうゝ山ま鹿ゝ　句空
三絃のさと鹿や絃ゆかいらうひ　季吟

行秋

行秋のあとのり中青空棋　芭蕉

ゆめきの細く人をうゝ世しうり　越人

ゆく秋よきうるわとゝもなる花ゝ赤　牡年

ゆゝめきふ数める家のあゝしうれ　浪花

行あとや晦日のゝあ社星の祭り　その丈

り秋の四五日よりゝ蔵この角　丈草

行ゆきや　を載てゝおくる風の神　東以

木ゝゝゝゝゝきて梢うら行あゝそ　乙由

ゝゝもゝや高ゝあゝとゝ九十日　来山

冬近

冬近ゝ時雨ゝ雲ゝゝゝゝゝゝゝ　蕪村

りのいゝ・雲ゝゝゝゝゝゝゝ近ゝ　樗良

古人續五百題並發句集

初雪

冬の部

初雪や うけかゝゝゝゝゝ橋の上　芭蕉

ゝゝ雪や内ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人ゝ雅　其角

初ゆきや 椿ゝゝゝゝゝゝゝゝ白丁花　嵐雪

花とよむ雪ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　来山

ゝゝゝゆきゝゝ梅引て出る朝戸ゝゝ　野水

秋雪や 波よ伊吹の風ゝ川ゝ　千那

ゝゝ雪ゝ 蓑ゝゝゝゝゝゝ朝朗　史邦

初雪や二つの草履あるくて隣まで　路通
ちらつゆきや松あらるして菜の畑　北枝
はつ雪や一面に降る瀬田の橋　李由
あつらへお琵琶のくる日とろ雪と　山子
初雪を鹿の角あもるまもふし　紅雪
ちらつゆきや人よりの先よりのいろ　三ヶ
初雪も花石ろとこの角　斜嶺
ちりぬるや人待市の松かげ　之道
その法の法初雪買ん節うり　水花
はつ雪や森言ふいひし夢合　知足
ちりぬるや小阪よりの道　配力
初ゆきやうるあ伊用の屋ぶき　朱紬

雪

ちらつ雪や人のありくに日のきえと　楚常
降れぬあと初雪ちらり未賊山　石周

雪こそ深多くむ住居この角　芭蕉
ゆきの日や船所ちらり新れし紙　其角
このゆきふむうしろおとさくも人　嵐雪
絵の中ふ居くるる雪の山路ゆ　支来
ふりうへて山ちらり見ぬ雪は窓　丈草
横雲よ織せちらちらゆきの門　支考
曙や伽藍ノくのゆ変見まひ　荷兮
十四や海手ふ雪し雪れ門　許六
雪の松苔根ハ知さーき名不我　京西

酒買ふあり子鶴うせ雪乃著
ゆき降や若宮の門を押さけて　来山
うさうさく雪のあはれ山さくの山　文九
車道さるかたの名のあしこう有　九兆
くらき夜ふ物かけこそりきれ隈　小春
雪の江の大船よりハ小舟こう那　二水
り烏森ところこそ雪の名を　芳川
芳、昏もるるはかゆきの多まる寄　偏子
ゆふの日やとれらゆきしの都寄　氏座
夜の雪落さの雪ねもうう枝ちくく　
川越こ対ゆるひ凄し雪の舟　小高
笠の雪徒首にあるてそしまる　卯七

大雪や名所のうちの淡くらく　一髪
ゆきとうん宿なれかこそありの侘　惟然
仰りものてちくそれもせし雪佛　一井
朝の雪隣あくりはなりのしや　野坡
雪ふくふ狂ものきうろ不二の山　智月
日枝ひとつ前くる雪えれ　乙州
六条の豆腐は沙汰や秋の雪　吾仲
ゆきの日や芋うう見へ子とり嫁　程巳
盆一茶ちりと野りくり雪の上　土芳
そうぐれ雪はえ西ありこと後　野水
峯くや鳴とりまると雪ろあり　史邦

雪吹

長崎や澎湃相ひて雪吹松　其角
村雲は見えず歩るや雪吹の根　丈草
雁鴨を波ふうちぬむふくきうの素覧
一下雪吹ゆりとゝしより馬の蹄　頭水
折とゝもめまり至極の雪吹うれ　秋之坊
ちらこえも同じ雪吹の雀この那　朝叟

霙

霙ふるハかまくらより沈の響　其角
こゝそれ降る音や朝餉のてまるを　面好
りう仕舞へ朝水くみのひと霙　千川
それ霙の鈴ふり出ほみそれうる　正秀
初こゝそを霙降るの闇とふ小鴨うる　蟬嵐
みそれ降宿は去まりや襞の夜著　丈草

初時雨

旅人と我名ぼまんとうの月しぐる　芭蕉
河原毛の鳥帽子の上や初時雨　去来
新藁は瓶根の雫やうるおれ　許六
初しぐれ野分ふ景のゆるものゝ　西吟
居ぬしけの多るもうるゝや初時雨　浪化
そゝのそこれ舌打海膳の射もこそ　言水
雷落し松を拾ひ出はうるおれ　丈草
芋食の腹ゝ〆じまり初しぐれ　蔀山
暮ゝゆく一ヶ月鳥やうるゝ　風竹
米川雀ヒきくや秋田の初射雨　嵐雪
ゝ〆ゝるの山をさゝゆまや初しぐれ　希因
初しぐれ眉ゆ鳥帽子の雫うれ　茅村

时雨

草まくらふ犬も声を聞て狐狸の声
客人やさらふとしたとふ迄と时雨　芭蕉
宿借る夜雲の借やを主とする　宗因
鈍根は夕日をかくす北しぐれ　末山
幾人か忘れかけぬく瀬田の橋　其角
松風の里を教とする志ぐれ　丈草
宵明となれば度々志ぐれる　嵐雪
食时さきし合ふ村は时雨うち　許六
志ぐれはく雲おろされて入日うち　去来
渡しまたより魚籠の郡　枚風
蔓半死志ぐれと落く时雨切　傘下
畠ふむ鳥も山見る志ぐれうち　風牛
　　園友

松山や志ぐれの足はとまひ　利合
葯菊の湯氣あたゝかな时雨うち　蓑雖
牛馬の臭うもなくて志ぐれ来り　浪化
志ぐれ孫ふまぐ松風のとむらと　北枝
鰯焼うさも伏見はしぐれこの家　卧高
汐錆は下ふりのとと时雨うち　烏玉
喧嘩より特は明ふ体志ぐれうち　車庸
食堂おとゝ色情なり夕时雨　支考
板屋や馬の森うねる小夜志ぐれ　史邦
小夜しぐれ隙の白を挽ゆみね　野坡
家くおよるくく森は志ぐれ絶ぬ　吞水
かゝふ舟の黒津おのとる时雨うれ　探志

霰

松苗ばかりなりて帰る去る夕べの系　三岐
湖や去る夕べの下に星のかすか　牝玄
ひきうしほ移りあなき市の附西哉　正秀

雑水ふ琵琶きく軒はあられる　芭蕉
海へ降ふあられや雲と浪は音　其角
老武者と指やさられんうあられ　去來
飛うつふ山石のあられや窓のうち　丈草
去る浪とつれてさしれ霰うえ　重治
冬風のかくてもはられ降ふう那　句空
秋とるの山田ふうふはられ是うの　正秀
景云くれまつはあられのりやう哉　堅翠

氷柱

九合羽はうくうきうれ霰一の角　知足
森添く雪馬ふむあられる根　伸風
むしろ帆ふ霰うふふ月夜うる　暮年
なくれ降日や奥店の鰭のいろ　卧高
一ト去きうり花とうはあうれうの系　松翁
味ひかくを鮒壽えねあられる　凡兆
盃や傘をさくとはうふあられ　宗因

仏ゆうふ長みしうあふ氷柱う那　鬼貫
風ふまるくはらうにさうれ根この角　一桃
打折て仏ふふ去きふふ系　夜舟
花風の義ゆきてうる氷柱う那　西鹿

霜

きれそこなる荒ふれまくるの霜は巷　芭蕉
霜朝はめふしやつくむ生姜味噌　嵐雪
一ッ茶や紅ちりくのを朝の霜　支考
初霜あるとおうなを船は中　甚角
はつ〜もに行や北斗の星の前　百歳
山鳥の尾ゑかくるや夜はしも　曲翠
就と子は寒夜をとろふ野ゐうる　溪石
後の跡ふむ足いくこ〜今朝の霜　野坡
窠とこ鶴の水を形れうし旅の霜　麗棠
かくは家や森さあはちふと逗の霜　路通
はつ〜もは泥ふとこれの草はいろ　文草
里人のこうりゐ秋橋のしも　宗因

氷

芭蕉

苅や紙帽の田井はうの刑氷　枕風
舟あてくきやく氷る森ゑう那　甚角
滝幅や氷は中ろいうり雲　亀世
我者を流まうあなの刑き氷ゐる　氷下
紅廉ふ結ふや氷は下ゑみち　知足
池の奥あ〜ひょあてぬ氷この有　孤白
ゆく道は音おり〜鶴きこゐり我　青人
五畠ひとゐ氷のうえのあれゐ船　苔翠
枯芦ふ氷代のとと夜〜れゐ素　芦角
刈株の豆あとさくふたとりかふ　除風
はきゐりて松葉あかきりうと氷　素イ
落氷や星のこのほるこゐきり水

凍

軒凍て初くや鍛冶の槌のもと　思秋
いとはけハ凍つきなこのふ笹の風　秋之坊

冬瓜

荷もなうて柳やかうき冬瓜哉　亀世
下京や雪積うへの夜はあえ　九兆

氷室

汗出して谷ふ突迎む氷室うま　冬松
海嵐腸は蕎埋めうき氷室哉　利重

雪車

峠より雪車ひきおろす温木うま　嵐弾
馬盃よりそりの引出と旦この有　一井
侍座雪車や先ふえうる左見拾　不玉

神無月

神去月ぬうう雀のまうの寒うき　其角
旅稼旨あけて忘ものうん神去月　素山
夕陽や流石ふきふふ小六月　鬼貫
うう家の佛ふうとしかみる月　任口
神無月火とりと称宜の恵た哉　言水
十月やのりくへ雲は恵みゆく　幽也
明暮は大根うましい神無月　泊徳
菅掃る田面ハ初とり神無つた　氷花
元山や化をあうふとかみな月　素覧
神無月豆腐の煮るめしうん　枚風
ひとあきり閑もあうるし神無月　朱雀
宗任ふ仏ふ神無月　芝村

小春

風もなくし息ぶく小春の郎　野水
大木の小春の常日と小春かな　補風

霜

瘦竹の根元に小春はなるれ　衣吹
小流れる空や小春はなの文　潘川
霜の木の枯の蘇芳の小夏の素　光彦
園菜を小春の蔭る端山の那　言水
小春は風なき帆も七合五夕の素　蕪村
海の音一日遠き小春の有　曉臺

霜月や日まぶちけく冬籠　去来
人影も素月の姿の姿しは山　甚由

師走

俗はとり師走の野を掃の塵　素山
うくひすの落ちる師走の有　支考
の賣は声きくこゝはもうる　荷兮
悪しくもなくて霜ふる師走哉　乙州
煤の多き分をうくもちをうる　岱水
奠茶に飯はぶ入りし師走かな　明布
せん湯のゆきうけ清きもちをうる　惟然
碓の新の月踏む師走この那　沒村
はぶ家雪の蔭もなく旅をうる　臥高
師走とも走くく秋は長さうな　挑隣
門松をまきて師走のあくび髪　里東

冬至

公和いちく朝日冬至この那　貞室
門翁の小家くも拾ふ冬ごもかな　樂天
書紀典主故園よ遊ぶ冬ごもり　芝村

神送

落るものとちるものとふたつ神送り　鬼貫
布子着てさしも見えぬ彩や神おくり　去来
雑水の名くてふきし神おくり　紅朝
吹上げ空まで未の雪や神送り　秀川

神の留主

家くの留主居なるなり大丈夫　其角
装束は廉も倒さね神乃留主　板風
神の留主ちとおりくの神のるす　鬼貫
駒犬や勝も神の留主　荷兮

十夜

十夜鉦明日は納豆もらうぞよりせめて十秋伽ぶ待ち九十九夜　言水
九月夜ふ月夜ふ月夜ふ逢ふ十秋ふ船　蝶羽
十月は十の代あり十夜この有　壽仙
ふ鳥をたふふく深む十秋ふ　波村
祖父くの京ふもふき十夜ふ　希因
あるたふと茶もあもたふくと十秋哉　乙由
達磨忌や壁に向くふふふ別　薫村
ふふふま忌やりふさう食の一ち文字　来山
達磨忌ふふまくく兼は羅ふ船　史邦
ふふふま忌や茶釜の洗も新法師　梅葉
　　希因

法命漆　芭蕉
御取幾　詩六
菓繻頭切法くらの御命漆　千那
法命漆や顱の青紅野比丘尼　史邦
おめい漆や帝衣の上社麻そうま　汶村
稱ろうや愁をハせ〜と日蓮忌　何之
法命講は殊数ふまつる抄不式　木導
おめれかう上戸も解法一庵ゑ角　汶江
ゑ鼻ゑ誠こうせ志ろ法ゑ志し　千那
もとり幾まつ左り庵ゑ松社坊　史邦
附西まる宮や八百やのゑ越　汶村
玉ゑふ三百人前そおとうこし　養浩

蛭子講　曙賣　御少焼

行かうと家ゑ蛭子講　多来
夷講我料理しく　曲翠
大酒や三日昆ろ　昨丁
蛭子漆ゑ明ゑ旅ゑろ　利合
あさまやまこさ月の曙ろ　来山
格くや乞れらろしき曙ろ　孤屋
こうゑ賣月日ま蛭ゑ下ケまろ　泉城
法少焼の盛物とろ　智月
御少焼や熊治ゑ法へ古ゑ　桃隣
法少焼や霜ろくし紅京の町　蓋村

ふんと系

吹草まくり月代青きあるしられ　定雅
客人、戸枕草ふの　小鷲　史邦
口煙やぬいこまろの酒おかん　竹戸

神樂

おすろもろくて身ふしむ神楽哉　北枝
ふるうわや神樂拍子のかくる声　路通
さく風か五さの機嫌やし也神楽　宗因
わりゝ鳴き神樂乙女の化粧ゑ　望一
乙女子は火祭を過ぬ神楽哉　亀翁

里神楽

ことさらぬちそ貴ゑれ里神楽　之道
つくむ氣や童ゆたくる里ゑくゝ　亀翁
結賃馬ゑ夜ゑ明ゑゑ里神楽　和尹

鉾

却

長鉾のゑうゆゑほう鉾ゑくき　芭蕉
ことくく葉さゆゑらー鉾ゑくき　其角
物ゑくゝ門ゆゑゆゑくと鉾ゑゑ　ム未
ゑふ門は竹ふ笠くゆゑゑゑ却き　文草
狼のひゑゑくと以長ゑ一鉾ゑゑ　野童
朝日の後ゆゑられ形りはちたくき　栄雲
世は中ハ足より寒ゝ鉾ゑくゑ　尚白
ゑく声の凄きゆゑゑゑゑ却　乙州
鉾ゑくき浮名忘れそ鉾ゑくき　之道
ゑゑゑゑよ下結ゑく雨の鉾却　氷花
食却やゑくゑと下ゑゑ鉾ゑゑ　路草
世の中をゑゑと鉾やゑゑたくき　数子

芭蕉忌

瓢箪の内も空也を神とせん　貞徳

ちらさじと古うもろこし空也堂　恩貫

弥陀仏とよんでもれと哀や野たるな　蝦道

佛名

芭蕉翁を蕎麦切町人信法流　史邦

そせ坊品や志ん倉へ空を米買ゐ　撈良

大師講

聲高ゐ佛よりなり箱の星　来山

仏名や鐘頭の香けうと煙り　洒堂

大師講ゐ門前を乗休み　楊花

ちらしなりて法穂を焚や大師講　可有

寄念仏

酒飯の飯酒ハいうゐ寒ゐ念佛　其角

傾城もいとゐ涼ふれ寒ゐ念仏　奚魚

ゐゐ念佛ゐれ出入の大工なり　大町

寒ゐ稲ゐ門場る庵も水ほらん　康乗

かんゐ念仏ゐ子ゐ佛ゐ法ゐなし　水山

木枯葉

人枯や木の葉ふかゐ寒ゐ風の道　素堂

禁より足さゐりよき木葉ゐ有　松風

もちはゐ木の葉にあゐる帯哉　風丸

蟬の殻つゐて葉ゆく木葉ゐ那　為有

あゐれもつゐみて落る木葉ふれ　四睡

炭屋ふいやしゐ木葉かな　其角

落葉

庭ハもちもみぢのちりしきぬ　宗因
賽銭を蔵して拂ふ蔵もなし　去来
秋行の白玉ふくる蔵ふ蔵ふ那　丈草
泥ぬれぬおちもなりけり袖のうへ　治徳
哀なる蔵なふ蔵ふ蔵ふ蔵ふ　荷兮
白ふ紅ふ紅ふもさふき蔵ふ蔵ふ　本導
一紫ふ紅ふ柿の実ふ蔵ふ蔵ふ　一髮
鶏の帰ふ蔵ふ栗のおちふ　如行
這出ふ蔵ふおちふ蔵ふねまる蔵ふ　鶴変
此夕迎ふ蔵ふ蔵ふ蔵ふ蔵ふ　何空
生壁ふ蔵ふ蔵ふ蔵ふ門のおちふ蔵ふ蔵ふ　如元
寒山と拾得と蔵ふおちふ蔵ふ　許六

凩

凩ふ蔵ふ蔵ふこふ蔵ふ枝間の角　芭蕉
こふふしや凩ほうふ蔵ふ松の鴉　野坡
木からしや川田の畔の泥鯛ふ　惟然
木嵐や芥中吹ふ牛のこ石　凩竹
ふふふふふふ道いそきふや煩つこ　幽泉
凩ふふふふふふ手おそふ入湯の蔵ふ　荊口
こがらしや夜ふふふふふふ散もせふ　智月
木枯や夜中ふふふふふふ茶の出ふ蔵ふ　里東
ふふふふふふ食堂の鳥ふふふふふ　草士
才嵐の雲より落る木の葉の那　左次
凩の更ゆくふふふふや梳ふふふ　甚徳
ふふふふふふや晩鐘ひとふふ馬十疋　楚常

冬木立

こがらしや神よりきる紀伊のきれ　甚角
木枯や剣を吹くふとるみ山　去来
風のあらし所々なる成　太草
ちらちらしや敷のこと動く幡の変　西邑
風ゆかしましらぬゆうきく系　葉言
木枯やいろことをるふる枇杷の海　牧童

見うりを風の吹くらん冬木立　耶棠
象の目さめしきさき冬木立　車庸
冬木立いろあしや山のたそがれ　甚角
かよくやそられやてる冬木立　奥口
谷入くく香ゆ鷺とやふる木立　蕪村

枯柵

川越て赤き足ゆく柵やなる成　鬼貫
柵ゆくく弓ゆ昔の盆清ゆり　甚角
うきとてとてゆ冬ゆくくね柳の角　その

色落ゆ紅葉を散ふと風の声　負室
付西ゆゆふて紅葉のちる日名　樗良
詩や歌や ゆうゆちり菊紅葉哉　風狀

菊枯

こうくしよ白ひやけて残り菊　芭蕉
蕪虫のいろいろやかくりて那　昌碧
山茶花いりとよりひくく残り菊　車庸
ちゆまくくゆ青き紫ゆもあり帰花　素秋

帰花

枇杷花

仏の木と同じさまにてもなしとぞ花
物凄やあらおりしなやかなる
五とり木の葉よりかくれ花　未山
鴨のとまるさまにて　鬼貫
流草のさくらに白しうるはし　樗雲
皆人の白ひきやすし枇杷の花　穹風
窓涼く後うら音やひとしれぬる　秀和
賢女あらん枇杷花の夕やめぐん　金羅
ちるれしとやふてさくや枇杷の花　一烟
琵琶くと松風ふくや枇杷はなる　野坡
枇杷の花多ゆきそめと日暮うり　二川
　　芙村

山茶花

山茶花ふ叢さうるも雪の中　治徳
さくら花や蝶のそばねもちうり　李東
山茶花やさびうりさと庭の雪　我葉

八つ手

雪の後けうそやう花八つ手　百里
こうふ〜ふ咲くさせ〜ふ八つ手哉　林蔭

冬至梅

草木ふそ〜ふ冬至梅　警水
日附斗のくるひそめうり冬至梅　汝上

椿

うりくく交ふ中や冬ぼうき
されそこそ葉入ふ浪ふ色椿　鬼貫
火とりて夜日ふるうね冬椿　言水
　　一笑

冬梅

ゆくすゑと森こうる在所や冬の梅　惟然
一さとの梅も二さとの梅も十分に冬の梅　扶摇
雪霜の骨となりてや梅の香　支考
鎌倉の俗ことごとくそんぞ冬のむめ　露沾
内義の吉酒を梅ぐるや宮ぢ梅　其角
笑ひ言はれまたきさもきそし冬の梅　希因
冬のむめ咲きのふちりね石の上　芝村

冬牡丹

めくるうまあるようかこころの冬牡丹　維舟
大和も数ある家やふゆぼたん　西武
ひらくくと空ぬけ風の冬ぼたん　鬼貫
海上は土の黒さよふゆぼたん　杜旭

水仙

水仙や門をしろくさく江の月夜　支考
小坊主の上下ぬくうり水仙花　尚白
水仙の花ぢ言さの日うけこうふ　智月
立ぼけの日新ぞそしや水せん花　素牛
水仙ぢ北をいくへのなみのあと　尚白
煤萱の中より出るすいせん花　露山
すいせんのほつれかくれや朝嵐　斜嶺
わく霜の歯を味ふこゑ水仙花　乙州

枯尾花

冬籠の仮家引けばうり枯尾花　蕪村
中くぼ根はちよくさりぬ枯尾花　蘆臺

茶の花

茶の花や鯨行方の流星　野坡
ちやのくるふ炭焼家をとふまん　巴風
茶のとりあや花をこまとられ　彫棠
茶はたるふ豆眉ゑをゑの那　紫雫
ちやのたるふや蛍の子はなるふし　涙花
茶は花や径をとけるる星月夜　亀世
ちやの花い物の序をとうるる　李晨

寒菊

寒菊や古つりとなる庭後　上芳
かんきくや孤くふ滴し軒のたま　諷竹
きくは咲くなるふるまて俳り　卓袋
くん菜や物ふ四五るん岩の蹴　野坡

石蕗の花

石蕗の花や水仕ふ流しくはれ　水仕
下荷の数寄藤るり石蕗の花　俳諧ふ知
井戸神の住まるけかり咲せ　養浩
笑るるも岩るそ石蕗の花　種文
空明の姿ふるるや石蕗のく那　蕪村

冬桔

冬くれの木は間ふるん賣ゑしき　去来
ふる坊や海を目前ふ滝ゑくり　亀翁
冬かれふ風の中をとまなる飛我　洞雪
冬四るるるや馬もあるふね亦打山　新玄
冬くれやまるるふけーホのるれ　文丸
ふ四るるや野ふ立りのく鍬はおと　芦錐

枯芦

枯芦や新渡入江のさゝらなみ　鬼貫
かれあしや鷺の櫓をおと捨小舟　蘭水
音そよぐふ川辺の芦は枯ぬうな　曉臺

草の上

ちのふさく枯くゝ餅つふ舎りうる　芭蕉
菊の上や冬さく薊の歯とゝ絡　移風
葛かれて壁を蛍とる養うる　琴風
枯芝ふまゝ殘るちのふゝ郷　巳百
小坊主も旅くゝれや枯ゝくき　配力

冬野

捨人やめゝうさうふ冬野ゆく　来山
まも出ゝを物荷ひり冬野ゆく　其角

枯野

若松の横荷ゝとなる枯野ゝ那　治德
月日をもうゝふかゝ枯野ゝ　智白
大腰ふかゝ投出とゝれ野ゝ那　琴風
撰ふや枯野ふ常乃主とゝ　陶白
ちゝりとなれやかれ野のあゝ石　玄梅
かゝしちの山路ゝ折迄枯野ゝ　呂丸
我ふ丹ゝくゝを枯きゝ目ゝ野ゝ　不角
松苗も枯野ふ目ゝ嵐この那　拓風
変る屋ゝ枯ゝまはいゝる枯野ゝ　土芳
塚ふゝ枯のゝゝ野中ゝ　和賤
川筋の遠ゝも曲れかれ野ゝ那　岩翁
白根へと雲ゝゝれ行枯野ゝ青　秋之坊

足ゑう橋ハのとりて持ぬ　乙由
芝ふ道あらぬかれぬるみ　芝村

日日江山三井寺の大根引き　詩六
今様もちぬ淋し大根曳　風國
家物ふ陸ゑ人をとるタや大根引　李由
鉢巻をとるとも寒流を大根引　野坡

大根曳

干菜

葱

玄賓死世ゑるさゑ干菜哀　甚角
うもらて葉を干菜を塩ゑ　奥兒
ひとり〳〵や一字の題の〳〵草　百花
葱のきゑ人格卧古家ふこの家　蕪村

麥蒔

鶉

鷄

麥蒔や妹ゑ湯をまれ頻ゑふり　鬼貫
むきさゑや野ゑ山ゑ雨ゑ　之笑
ちゑ霜や麥蒔土のゑゑおりて　北枝
麥をまく人ゑ人ゑ赤ゑ〳〵ら　秀泉
みをとゑの麥まれのとを蓋ゑ　沾徳

紙父ゑ人起ゑふゑふみをさゑい　乙州
鶉鷄燒火ふ通ふ朝戸ゑ家　沾德
木ゑ〳〵や窓ゑ吹通ふをさゑい　葉芳
晩ゑこの声や碓ふ踏みをさゑい　惟然
こゑをゑい家ハとゑゑゑゑゑ書　如行
ゑゑれ雪ひゑ　まとゑゑゑ鶉鷄　紺甫

千鳥

ほの〳〵崎の園をこうよとうや嵯峨の雪
昼の内鶏の移りの千鳥うの那
公武や釜の沸ゆふ浦〳〵とり
かゝる鹿の馬のあとゆく衛られ
炉の炭を帰るあるふる雲
うちも移ぬ鍛冶の火書し小狩衛
冬の日と尾ふ〳〵れてやうく〳〵雪
家は新江入ときや帰るとり
葬の火をうつるうふ素やう渡る鳥
松金れこけて走るや村ふとる
朝鮮をうこもあるく友千鳥
船は焚火ふ声をうるる

芭蕉
素堂
其角
傘下
桃先
泥足
洒堂
野坡
李由
素仲
村俊
亀洞

鴛鴦

ゆゆのうてけるとふ江やふとり四
赤き浪ふ浮補かゝるちとり石
ちゝゝゝや風の吹きるむふふ鳥
汝を引牛のとくむや村ちとり
涼出しハ玉ちゝりやむふふとる
室君をうもるるし小狩衛
小夜ちとり庚申待は舟函形
をしのきて物ちゝなる小池哉
ふゝもれやふあふ鴛のふかゝみ
鴛の妻は世をあまりする姿石
をしちりのちゝやとと落氷

負徳
冬柏
迷亭
苔渡
治州
合志
文草

尚白
山川
蕉下
文里

鴨

海くれて鴨の声ほのかに白し　芭蕉
霜曉林さゝくや鴨の声　丈艸
明ぬるや城にとりまくかもの声　許六
鈴かもの声ふり渡る月寒し　嵐雪
蘆かれて吟物淋し鴨の聲　野坡
潮壺をのそいてくゝる小鴨かな　程巳
かけ波に背雪ちらしかもの声　東粲
鴨飛て一すち長き雫かな　氷花
大手や雑波入江の鴨の声　春莪
かもの足流れもあくね和ぶかな　宗因
鈴かもや背中に雪のをきつ哉　支幽

水鳥

かいつふり

水鳥のおめくくく浮にあまり　鬼貫
みつ鳥の枕雨に鍵き山田の家　湖風
さゝ川とりし似をあそふてそ　几董
水鳥のくゝ頭やらうて浮ところ　揚水
みつ鳥に餌を飼傍の乞食哉　石周
水鳥の朝日漱ふろ淋ら繰りかれ　由之
みつ鳥も森入てくゞみ金石の海　路通
水鳥や舟に菜を洗ふ女あり　蕪村
かいつふりはなれてすけなし片男浪　亀翁
荒广江や竹筏をのそくかいつふり　汶村

暖鳥

荒一重うちぬやを会の炉くべ者　甚角
猪窟や荒引うもぬくめとり　許六
暖合あしうふうう吸こそ鶯うる　尚白
むくるこのくもうからうぬくめ鳥　素堂

鶯

鶯おうの門先はけて鶯しいこと鳴　芭蕉
あうの日の謝より出る光うる角　苔蘚
鶯の目の謝うき鶯の夜居うる　子英
雪のそる彩さうやけしや鶯の声　桂夕
木かぶしふ吸とそれうり鶯れ市　李由
鈴ふうふ鶯に晴うる尾上うな　冬市
うれうるの鶯は大緒やうるめぶれ　胡市

鶯狩

うり多て殿の威をうる鶯狩うん　亀翁
御鶯野おそうんそおうう細代う　李由
鶯狩の跡よひきうう蕪うる角　蕉笠
うう匠ハ鼻のかまれねきうう形　乙由
鶯うそれてむるしく月とうる狩代　曉臺

夜鼠

大鼠て豆鶯狩ふうり里夜鼠　甚角
我金ホ月夜うそうる狩鼠うれ　工齋
狩鼠鼠や大のとうむる塀のうう　苔村

木兎

生う向ケ体木兎ハそれ山路我　子英
木兎ハ眠るとうう体をうう見うり　才残

冬の魂

綿帽子の糊をちらつかせる冬の魂　許六
百年の後なき人やふるお魂　蕭山

穴熊

冊波路や穴熊打も悪右衛門　嵐竹
穴熊の藤首ふつてもまつぶれ　山店
そち巻や穴熊打のんす五ふ　史邦

鯨突

おそろしき鯨はきらぬ首の月　猿雖
逐はるる而もなつてくらす突　迷宇

羅

ぬしはけや奥を火宅の一つ羅　和及
羅や夕日ふのそく奥のつけ　如空
ふし漬や苦浦領の濱年貢　史邦

網代守

さらふのむ度義ちらつく守　其角
世界搦まかけてやうぢの網代守　素鈍
裾先の山ろけいつとあしゐ流れ　正義
網代木のゆるみやうるる氷ろ有　不角
かつぶしやあふちちみてあしろ杭　何之
川はふや声吹流をあしろ守　其徒
夜の雨仕合いうあしゐ流ふ　鞭石
ふを流れて浜の網代ゆ義狩し　心水
網代守宇治の船る舟とりまろり　許六
あしろるまうさ死ねやち搦火打　乙由
網代守大根ねさをとろあちり　其角

生海嵐

海嵐ふうもむかしきようや独行
打浪ま身をまうもうふるまとうれ
めつくじと生海嵐と燒やとめく変
蒟蒻の角むつじと生海嵐う系
ひく汲ま法れてをうしきるまこうれ
汲汲ふまうひ入ゑき生海嵐う角
法り蟹の海へくうけてなきとうる

嵐雪
車庸
俊似
左次
莫陵
利雪
希因

斷

行をして元五湖葵坂の寒氏俊
葵坂ま軒の松風うちふなり
うの雪や坂北吸ゆの陸うふき

素堂
曉臺
一州

河豚

遊ときねふく弱う縁て七里まて
河豚ゆくふ元のあこうりや下川糸
盗人ふむひしもいくんふくの鉄
ちれてこそいとく横ふめてこうけれ鰒
ゆくゆとうの色ようかくえ河豚汁
鰒の子や母をふくれくるる行
今さくふ弱ぶれて味うふくは声
食ふてや死ねうとおりふ河豚汁

芭蕉
其角
去来
牧童
如泉
八橋
水花
斧卜

鰒鱇

鰒鱇をふりきけうを厨うれ
あんからや小ふりうれとも二人前

其角
史興

鰤

鰤のはらら虎ー食箱の入る下
はー去や次生ふもりふ丹波鰤　来山
楓子

乾鮭

をゝゝしの乾鮭買ふて安いりの　鬼貫
からさけと呼りゝゆゝやめゝ角　雪也
ゝゝち抑乾鮭うりをゝゝえちり　馬莧

藥喰

ものいとし牙をちゝふれゝく茶ゝゝ
禅僧や悟りゝこう人のゝゝちり資　来山
客人ふ見物させゝゝゝゝゝゝゝゝ　芦李
ゝゝちり食罪科もなし多ゝ窮　禅桃
ちりゝゝと五徒ちゝけり茶資人　史邦
茗村

きむ 住

葱しゝゝ洗ひ立ゝふ立ゝ伊ゝゝゝう那　芭蕉
火いけ魚斧戸ゝゝゝゝゝ亀の茶　去来
正客の行儀ゝゝゝゝゝゝゝゝ　野坡
ゝゝゝふ多賀のゝる居の寒き裁　尚白
膳ふー祇ゝゝゝと生ゝゝゝゝゝ　涼車
夜ゝゝ臣の脾胃のゝゝゝゝゝ寒ゝ代り　千川
雪あふれ仏ゝゝゝるゝゝふゝ　夕菊
蕎麦切ふ吸ゝゝゝゝゝゝ裁　利牛
ゝゝふき日ゝゝふふ下ゝゝゝゝ梱艸切　千那
当帝木に茶の藤ゝ浪のゝゝふゝゝ　游力
けゝふのふ水あゝゝゝ居る馬う那　魯中
ゝゝ紀ゝゝに沖の雲ゝる寒ゝ共　拾石

小屋風ふ葉を引かへ新蕎麦さく
植竹ゝ川うせさふゝ道の端　斜嶺
あらふゝ岳陵の白の蕎麦この有　土芳
霄自のあらくゝこと咲るさふ　九郎
さふけ立て八幡ふれと森移の狩をし　卧高
蕎麦花夜を裾ふ鞍盡く旅藤うる　支考
ゝと刷毛ふ裏紙の竹はを伐　左次
晨明の雲ふ走みはくさふはる　波村
桐の葉ふ八葉みくゝを一内をけ　魯可
生壁ふよりはきかゝ寒きう　野明
蕎花毛をまもなくゝ山ふさふさ我　李由
あらふふ冬の日向の蕎麦こゝ　柳玉
　　鬼貫

頭巾

日くゝりとさゝ駅巾の浮世うる　其角
山里や頭巾とるゝ人も形し　観水
かゝれ家や元耳うけて角はきん　專吟
節季ふふ中ゝなうゝ人き改巾ふ　雪芝
抓針坊明ゝくおくはきんこの有　之道
行霄の改巾や耳を明けて居る　鬼貫
あふ蕎もその蕎麦道も改巾ふ　朱紬

足袋

古足袋や月わとの宿はきね　素堂
揚米配やたゝひまゝ敷をと敷持　耒山
雨ふふゝ足袋やの寸子の蕎麦我　毛紈

冬

籠

鶏の尼あしたやふるさとり　丈草
檜葉や本堂の堀の冬ごもり　許六
冬ごもりいさりてるめもさらねへ　彫棠
下帯に竿にかけぬく冬ごもり　木節
そこいあや廣間のすみもふる竈　怒風
ふるさとり眼のくらひもんあり窓　朱紬
汁鍋の跡むくらやふるこもり　園友
松風やいうもひとり蚊の竈　前江
沖の嵐もるやや静ふるこもり　沙明
鳥の羽のひらひらとふる籠　酔刀
大儀して鍋蓋ふるこもり　李南
人代吐く息をなるふる冬ごもり　千那

合衣

土瀧ふるや蛍ふるなくこもり　宋盛
老杖をはらはらふる雁くふるこもり　几峯
旅ふるふる衣を天下の合衣ふる那　嵐雪
絡つてやつとさけふるふるこもり　移風
肩てふてふ夜の合衣も形ふるこもり　志草
はきさきてらふく合衣ふる原ふるこもり　尚白
嵐退くく絡つこの合衣ふるこもり　蕪下
あつ合衣夏の泡ふるこもり　千那
蚊ふまうまうと紙帷もふる合衣ふる　惟然
森かるるふるるの冷をあるふる我　子堂
沙弥律師ふるくくと合衣ふる那　蕪村

蒲團

蒲團きて寐たるすかたや東山　嵐雪
我ふとんはさく旅のさむさ哉　祐甫
古今にひと夜はふけるふとんかな　蕪村

紙子

志ゆ桝の木の葉の後や紙衾子　宗因
紙子着てよれとも火燵の走り炭　丈草
南天にさはる音せぬ紙子かな　木導
さてかしくならねとりえや古紙子　正秀
人中に我まさ恥るかみ子かな　湖春
寝かへりをきけは隣も紙子かな　二暮
ぬ住居や後夜の紙子の已形　景帘

火燵

住ゝくとめのくはしまる巨燵かな　鬼貫
また夜中や火燵際まて月のかけ　友来
下京をめくりてこたつ行脚かな　左草
住よくあよと寝もあらふれ巨燵かな　嵐雪
寝ゐや巨燵ふとんのさめぬうち　甚角
斷して火燵に孫入は童への哉　岩翁
灯のうけに顏をとひするあつかな　奥兒
孫とうるゝ咄をちに遠き巨燵かな　松翁
宿かへてまろうち臭きこたつ哉　我峯
浮亭主の分別をする巨燵かな　氷花
縫物に主より伸をたふれこの肩　亀翁
おし合てこたつにぬるせいつも旅　文道

小若流よ高くきうハまる巨燵うる　李由
見墓よ鑿結うちの赤〜ハ月うる　毛紙
自由さや自と追ゆく垂こうハ　洞木
りめもりひ火燵をあけていうるうん　舟泉

埋火

埋火やちうふねいのちふ息かけん　来山
うはこと火の南をきけやきりぐ　其角
埋火ふ根ゆとハいるを夜明うる　汲村
うつこと火やちうあれて烟ゝ枝ひとろ　風渡
うハみひや蛍る鈴をうちうりて　宗鳴
埋火や絡ゝみハ巻る鶏のこの　蕪村

火桶

霜のあち桶子ふきけは火桶ゝ茶　芭蕉
ふるるそこ焼れ火おけのあそこき　淵竹
朝寒を火桶よのことをきけうる　濂山
おちふね今釣しもるる相火おけ　雪言

火鉢

黒塚やけちる女のそく火ちち　言水
うしろ絡より圓座てえそね火鉢代　岸口
のまゑろう新忘はてく火ちちうる　順水

湯婆

湯婆うふ駒の出さうるまつ死くれ　涼菟
ふんはるハ羽こうそなうれ暖　雨音

冬籠

山畑や吉みのこしてをかすへ　去来
冬かまへ藪ふ椿の多いから　珍碩
山里ハ留主うとうとして冬籠　渭竹
妹ゝ手に渡越ゆきしるかゆへ　和及
唐船の通ひハ多ゑくふも籠　凉俤

炉開

炉開きの日代ちゐしの土菜うる　嵐雪
うひふかや鼻をうゝて雨を笑　子葉
炉ぬゝきうや海代よふ合の子　其角

麦粉子

ちふ餅のよるはちきりや麦子餅　宗因
三日月のをらふきおとよ麦子うれ　其角
子にあきてせろしに二ツの白の子我　青丈

口切

口切の茶や常暦末の若みとり　主圃
ふちょうや藩所夢ををかしら　正秀
はきりやのしもの裏の貧之さ　西堂
はきりのまゝくおりひや日本橋　求花
ふち切や小城下ふうぶきゝなく　其村

納豆

納豆とるときるれや嶺の雪おれし　丈草
砧ぶきて又の春さめや納豆しら　其角

子始

数の子ぬかとるえゝ事始　主圃
師走兼は一日やけはるゝ　路通
ちとはしめ又や梯ふら桁うら　高白

髮置　和及
袴着　重厚
爐　言水
　　秋之坊
　　山蜂
　　似竹
　　日下

髮置やおるゝ月日ゐ三編組
かみおきや宇ふく孫の曙むすこ

袴着　甚角
この子おそるまゝけるまゝ兒や兄弟　六亀

爐の眠る浪うきうきう絲須广明石
うの隅ゐ月を酌の神とゝうれん
淋しさやるうの足のうゝも居を
炉をめゝは命はれるゝ摺の儀
うの友や顔ふかゝまゝうゝ体翁面

摺　鬼貫
　　立兮
　　巴丈
炭　亀翁
竈　春宿
　　曉臺

うゝうゝや摺ふゝとゝ陽る煙　烟草
樵木や風雅をくきく摺の書
面白の旅藤や摺を夜長ふゝ
春ちゝゝ摺はゝみゝる葉畑我
お尼ゝをゝの紙みゝゝ夜の摺
雄子長はゝゝゝゝ摺明王

炭竈や煙をねけゝ猿の声　甚角
ゝゝみゝゝゝゝ経ゝむ法師式　不欺
炭ゝゝのけふりの猿や雲の浪　之道
ゝゝみ竈のはふきゝゝゝ蔦ゝふり　亀洞
炭ゝゝやはゝかゝ体風のむき　子珊

炭

冬かまへ一小俵やきてみてこのうら
炭焼や朧の清水暮ぬれて　宗因
さてみの火よ並べふきたの光こそ　生角
小野といふ名ぶめやされすり炭俵　北枝
片眼のうぶしやうの炭のかまそ　和賊
雪ゐ今朝炭のおとてはぬちの内い　伯德
炭ゐてさむ音さへ求る森耳ゐ　詞山
　　嵐蘭

炭賣

炭賣や隣は人ゐ焚ふ四ゐ　文草
さてみうりも面ぶ一ゐ雪ゐ　温故
すみ賣や宿ふひとゐの帆ふ　心流

冬の月

雪の帆をあらうまきもてんふの月　嵐角
雪ゐうりもさふ白髮ゐ冬乃月　文草
肝藥はまとゐ雪ゐ月ふ四の月　曲翠
襟まはる首引今ゐ冬はけ支　杉風
咨月の中門賣あるくふゆのつれ　里圃
かさゐふもいゐむ養の戸や冬の月　風國
れ一舟の砂ときしゐやふゆの月　素覽
奥谷や遠うちあもてふ四の月　里東
塀裏の相のホきちちや冬の月　朱紬
足りともゐふけて冬一文れ月　我眉
狼のかりま高ゐりふゆの月ゐ　奚魚

寒月

おはぐろと寒みを月の光こそ　土芳
あるうらも氷の角をうみそめ　鬼貫
寒月や門うきぬきの大高！　蕪村
寒月や四条の橋も我ひとり　蝶夢

寒雁

寒雁や柏子かくれ川向ひ　牧童
かんとうと行うぬ橋立の潮北　行露
寒声の出るを聞ふる川べり　知春
旅人は寒声ゆゝ頼田の橋　桃妖
寒雁やあうぬ別を隣りう　暮子
かんとうや山伏村の長ぼうみ　仙杖
うむ古ふ古ふ古ふ風ふ後ふ子そ　蕪村

寒の入

厂ふやふ変ふれふ寒ふの入　風國
鐘の声ひとしほ寒ふ夜ふ彩　作者ふ知

寒垢離

寒垢離や上の町まで来りまり　蓑村
かんとうよおのれ本間のうえ方　峯及

臘八

臘八は愚癡を一日ちゝけそ　諷竹
ろ奥き粥とくりや我ふ腹　尚白
臘八や八瀬の藪も山を出る　乙由
臘八や霄はあうふ述ひうめ　旣白

胝

あうき足の膏菜法ふ厳寒戎　木導
胝をゆさ灸ひうや荊子ひ　惟然

霜やけ　羽紅
霜やけの手をふいてみは雪もけ
梅をうるまでに霜やけも芽しき　山川

冬日　汜德
生壁ふ梅ふふ冬の日向この糸
冬の日はあ梅ふ梅をみのそ恋し　言聡

冬夜　勤也
冬の夜戸ハ半分なは犬の声
妙母は数の目のり方や奥戸棚　珍碩

風呂吹　甚角
日本の吹ふきとい比叡山
風呂吹やその夜は夢ハ寺ん城　琴風
千年井をふろ吹きふ汲ふ也　午寂
霍の毛戸風呂ふきうちく窓の中　圃指

節季候

節季ふの来れば風雅も師走うつ　芭蕉
節季ふハ左りの耳ふ唱門の糸　甚角
せちきりや せ々ーきーのもとひとの　路通
節季ふに白ふ糸をくれふちり　田平
目ふかくれるけもたまやせ川きん　一泉
節季ふもたまとこふの花ふ那　毛紈
せちきりや抱えて通ふ関の前　窩川
おとろけや念佛宗生せ川きる　宗因
節季ふやまふ天王寺御墓山　ちく
節季ふや打揚ひゆく船の上　紫雲
せちきりの拍子をねうと明石ふ船　桃後
節季ふを酒の心附を貰ふ　乙由

煤掃

煤くらきハ已の栅洗る丈ニこの邪　芭蕉
畑中によしの静やそくそふひ　嵐雪
さく掃や山風うけく吹き通し　夫草
いろ方へゆきてあそらんそくそらひ　拳白
煤掃くく仏ゆくら足ふね家の内　月下
家くくや形いゆしきそくはふひ　祐甫
すくそきの蕎ふかくはあ数寄や我　史邦
夜の火や不破の関ゑのそく掃ひ　如行
煤くきしかしら紙はくむ淺のみ　黄逸
張かしそこともに家の朝きしき　知足
梅うえふらし絵あらせやそく掃　百里
民の家もまそあふそくり煤掃　宗因

餅

糯

弱法師我門ゆゆせそちのれ　甚角
餅搗やあくりかゆくる鶏のをや　嵐蓁
一くせや餅はくく白のそそ見ゆ　万子
膝かしら出して餅のそそはる邪　東雅
りちつきふ小腹をさり瘧疽ゆみ　史邦
餅はきや白も薪ゆ松くはし　之道
そち搗の手使ひそそや小山伏　馬佛

衣

配

燭りちも後をそそそそや衣くそそ　野坡
そちの手をそそこの七物る衣配り　木導
きぬくそりいそそうね新の九日ころ　望翠
師走さく一条夜のきぬくそそ　野径

年の市

年の市終をよ必らん羽織との　甚角
長寿ふ唐物もなしとしの市　氷花
とこしの市ゝ年ゝ業やをけら賣　しゝし
渡し場へ人引とまはとしの市　奥奥
我数もそれのに荷や年社市　麥林

節分

打まめも戸のあるかゝの響ゝる　亀翁
おこれとや脳ふゝ川ゝ鬼の面　荷兮
年をとる鬼よ後人や鬼ぬ豆　甚角

厄拂

ゝ後ゝきゝるやらふとよ人厄拂ゝ　重頼
変よゝ武もゝあのゝけも厄ゝふゝ　太祇

暮れ

下間ゝくゝらゝきゝせゝり屋ゝち　巴山
暮や二十七夜のゝ川ゝ軒　良圖
日のかゝりふ塩ふく行の翻この那　桃隣

年忘

奥ゝ屋のゝ後ゝ人ゝちゝを年忘れ　芭蕉
引燈を消せゝ嵐の雪ゝ　太草
夏ゝゝれゝゝゝを敷ゝゝかゝ　如柳
そは切のまゝ一ゝやゝゝゝゝ　宗因

行

行ゝの空社隙さゝ人ゝそかゝき　鬼貫
少ゝ年やゝ賀造営の祈祝人　許六
引ゝゝや伊勢社浄燈の糊細工　琴風
ゝく年ゝ木の家交りのゝゝ歳　沙明

年の瀬

としの瀬や漕を揃せて引行ふ　木山
年行瀬やひらゝあ香心鶴の拍子ひ　其角

流年

あの高れうろ高く年の淀みふん　素堂
なるゝ〳〵や不動陀羅尼の年の垢　其角

夏待

とり〳〵火の紙ふ玄まり庵ろ那　鬼貫
まゝまうやことに女の賢の出来　同湖
雪ゝ春ゝ春まりろ社使の有　ろく

岡見

岡見もと妹はくらもねゝ人の門　嵐雪
日のかゝ人まろ目の引長ゝ那　言水

年籠

月もなきあのあふ〳〵やとし籠　召波
年ふりり鏡社中ゆ居りまり　曉臺

大晦日

揉ふりむ舎妓の涙や大晦日　耒山
ゝ〳〵の夜は鰤やゝ〳〵や三の脂　去来
ゝ〳〵人ふまゝあゝ年の一日ろ船　仙化
助番や二十九日の大みそろ　孟竹
ゝ〳〵の抜もかゝ波をゝやなりぬ　雄羽
年は夜ゝ豆走ふろゝ俵このな　猿雖
一ト声きり啼くゝ除夜のゝ　利合
山伏や出立ろろ除秋のやみ　正秀

歳の暮

冬雲とのさそりまとこしの暮　芭蕉
股引や膝くゝみ出て年のくれ　千那
木綿買門の座敷や坐しの雪　馬佛
問かくをくれしもなしや年の暮　曲翠
見めきて注て稼ぐやとし社雪　楚水
駕籠をまゝ〳〵ぬくせは家ぞ哉　牧童
出かも出くゝ彩やとし社くれ　許六
せるゝも歳のかけよ年の暮　思濱
少しの雪とやめくを只余波う雪　盧水
天地は盗人ぬすやとしのくれ　曲水
此くれもまゝ探かへしお招しこゝ　枚風
采虫の石臼めくゝ歳雪ゝ雪　鍬下

年内春立

例しさゝと舟の波くゝは年のくれ　拓風
年寄もまきくれぬりのや過れ昏　東順
お奉行の名さんもうちゝ年くれる　来山
くゝとゆく年のまゝみや伊勢参　去来
猿猴の名ふまとかゝや年は昏　嵐雪
小傾城ゆきそうゝん少しのくれ　其角

立年のうちきとゝくゝ春かゝみ　負室
日も八日なゝしゝとゝのり元朝の夷　来山
去年ふ桃くゝとゝやうゝむ年の内　鬼貫
名は夏ちゝ海の外や梅のそな　智月
うゝ船ゝも一首よみまり年の内　乙由

東都書林

下谷御成道
青雲堂英文藏板

俳諧故人五百題	杜露庵撰	全二冊
掌中撥人五百題		横本全一冊
續故人五百題	一貞庵撰	全二冊
發句五百題	白雄房撰	全二冊
新五百題	田春彦撰	全二冊
新〻五百題	全撰	全二冊

近世五百題　竹垞居士撰　全　二冊
嘉永五百題　多川居撰　全　二冊
今人五百題　東溟撰　全　二冊
續今人五百題　梅外為山撰　全　二冊
同　三篇　全撰　全　四冊
十萬發句集　洞海舍撰　全　四冊
一具庵校
叢句類聚　八朶園撰　全　二冊
名所千題集　田毛庵撰　全　三冊

今人百家類題　遠日庵撰　全　二冊
近世十家類題　全撰　全　二冊
近世名家類題　全撰　全　四冊
題林發句集　由警撰　全　四冊
乙二七部集　全　三冊
蕉門菊句集　遠日庵撰　全　二冊
俳諧一葉集　芭蕉翁一代集　全　五冊
同　俳集　全文消息　全　四冊

俳諧四季草　著者つ人名歌集こ　全四冊

全集草　全　全十六冊

嵐雪句集　全一冊

風俗文選拾遺　全二冊

天下一方

登龍丸

合物一切
さし合なし

壹粒入
一包代百文
七粒入一服
代六百五十文

このとしの登龍丸は天下一方我家に秘法にして疫疾霍乱の妙薬なり
ちうりがくの効能ハ十年以来疫疾霍乱ともふさぎ腹痛嘔吐
ゆがらぬ人も猶きゝ粒を丸ハ一巡り粒を服すれ
三巡りも利めるる時に忘れるなく疫を治し
むくもとひらく丸福金くいめるの銀なり見にしるつく
乳の液れを補ひ乳血をめぐらし腎を調へ乳力を

しゅとちこそはさうやうふ英者也終しこれ病延命する
る数万人利ひまくるみくまちの功の大なるるの所今こ数年代
不思議の妙薬こそ功たふまくる所

一十年世年喘息
一頂風の痰
一咽喉ぜりつき
一痰飲ぜりつめ苦
一痰ふ血交り
一動乳つよく脳神
一婦人産お産後の痰
一労症の痰
一からせき
一小供の療せうべん
一痰飲はても出る
一小児百日痰
一面飲うまくもくの痛

一面飲ようて乳ふさぐり
世外痰喘面飲より起る病一切より
一寒気とつるふ人時に利なる時とと言るの主の妙こ
抑痰喘こ薬むてのしより法の出物ふもしおほく薬ふ
を不ふよりてこれふ痰喘いふ月ぶぐじ法痛ふく
まぐくも逆にあるやうにれることとへどと痰面飲こ
一病むいへどと治しぐ紀りのまりまるる有まの
膏能九ち年久しきこ痰面飲ふく遠療手をとくし
百薬共用るるとへどと治しぐ紀痛ふくもまこ
やうに治しく薬い手ぶ痛ふく第人とまこふく

まろうるよ一人として治せざるはなく天下こぞ
雲の業あるく紙月数もつもりながらもかゝる
いとゞも下〻業にたゝれるく婦人産あ産後の利し寒
ちの紀と知るべし能く判しいつまりうきこの法あるを知る
べし尤外さしこうる義業多くいくはる色紙は吟味こと一たよ
ゐるべし決所りまくは下求ゆ下〻

東叡山
御用 御書物所 江戸下谷御成道 青雲堂英文藏製

江戸英法あるに新出版所
阪求ゆ法下〻